

第二次大戦の

戦勝国

日

本

著者 水方人子

編者 喜早天海

目次

はじめに	1
第一章 第二次大戦の戦勝国・日本	
日本は敗戦国にあらず	4
第二章 回顧	
韓国と北朝鮮	14
南京大虐殺	19
総理大臣と靖国神社	22
天皇	25
戦争の恐ろしさ	30
第三章 日本を思う	
明治維新の底力は何処から出てきたか?	40
成金帝国、日本の誕生	41
自由民主。日本は夭折した	43
L/Cの見積もりを誤った日本	45
日本火中の栗を拾う	48
米国の姿	50
日本の道	52
あとがきに代えて（笑顔で振り返られる人生を）	57

はじめに

私が生まれた時は日本人であった。日本人として、教育の義務、兵役の義務も果たして来た。しかし、私の心の奥に中国と言う祖国を持っていた為か、時には思想が悪いといわれた事もある。今にして思えば、同じ頃、生粋の日本人の中にも反戦論者もいたし、神社参拝を拒否する者まで居ただけから、私一人が思想云々とは不思議な話である。勿論、予料練にも、予備学生にも志願せず、のうのうと学徒出陣の命令が出る迄暮らしていたのだから、忠君愛国の端くれにも入れて貰えなかったかも知れない。

六十を迎えたから、人生の整理期に入ったと思う。私が人生を回顧するのに、今は台湾人であっても、日本人であった頃を空白にする事は出来ない。

日本は変わった、その変化が余りにも多く、しかも日本人自身が良く気づかない面も多々ある。例をあげて見よう。「けふがくかふで、てふてふを見ました」明治のおじいさん、少しぼけている、と言うだろうか、或は外国人だから不明瞭のまま相槌を打ってくれるだろうか。では新かな使いで書いて見よう。「きょう、がっこうで、ちょうちょうを見ました。」即ち「今日、学校で蝶々を見ました。」である。私が怪しげな日本語を使用した、と誤解しては困る。昔は前のほうが正しいかな使いであったのだ。

戦後フィリッピンで三十年間戦闘を継続した兵隊さんが、いきなり日本に帰って来たら、言葉を忘れかけていたと言う。ペルーと一緒に日本に来た外人が明治初期に再度日本を訪問したと仮定するなれば「刀をさげていたあの丁髷（ちょんまげ）さんが見当たらないが。」と質問したくなるであろう。今時、お侍さんの風態で街を歩くと、道を行く人はチンドン屋が通るとしか思わないだろう。

今頃「俺は士族でござる」と鼻にかけていたら笑われる。終戦後、四十年を経過している。終戦の年に生れた赤ちゃんは今頃四十歳のおじいさん、おばさんになっている。世の中の変化は当然あって然るべきだ。子供がいつの間にか大人になった、と驚かないのは側において育てているからである。たまにしか見ない親戚の人が、まあ！ この間よちよち歩きのあの子が、と驚くのは、たまにしか見ないから、その差が特に目に付くのである。

山の中には森が見えないのである。吉野山の桜は山の外からでなくては満開の味を、その雄大さを知ることができない。奥千本の中に閉じこんで桜を論ずるならば日本至る処でそれが出来る。限られた何本かの桜を例にして千本の桜の味は表現できないのである。私は日本に入国したり、出国したり、日本人であったり、なかったりで、ちょうど吉野山に入ったり出たりしているつもりで、日本を論じたり批判したりしてみたい。或いは別の趣がある事を期待しながら。

第一章 第二次大戦の戦勝国・日本

日本は敗戦国にあらず

1 第二次大戦に於いて日本はポツダム宣言を受諾し、無条件降伏した。縦から見ても横から見ても敗戦国である日本を、私はあえて戦勝国と言おうとしている。先ずは何かの間違いでなければ皮肉ではないかと思うかも知れない。しかし私は夢物語を書いて日本人にへつらう気持はない。戦後四十年経た今になって私の正真正銘の感覚を吐露したい。私の肺腑の言であり、日本人が日本だけには知る事が出来ない、感じる事が出来ない新しい見方を発見するかも知れない。

2 日本の勝利はポツダム宣言受諾と同時にその第一歩を踏み出している。軍部は国体の護持が出来れば、無条件降伏もやむを得ず、と言う一派があったらしい。即ち天皇さえ安全であり、皇室さえ安泰であれば、私達は死んでも良い。と言う声である。これは健気な心根であり、天真な子供の心理である。重罪を科せられた兇悪犯人の子供が泣いて、裁判官に「親父を許して下さい、私が親に代って罪の償いをします。」と頼むようなもので許可される性質のものではない。皇居の前で多数の日本人が土下座し、人によっては自殺して天皇にお詫びした。犬死にすぎないと批判する事も出来なくはないが、その心意気は天に通じ、日本は遂に天皇制を守り通した。それはちょうど無茶苦茶に破壊された蜂の巣であっても女王蜂は生き残った。女王蜂が生き残っている蜂の巣が復興出来る事を保証されていることは当然の事であろう。

3 この例えは妥当ではないとする人がいるかも知れない。天皇制廃止論を唱える人から異論が出るかも知れない。しかし私の話したいのは天皇制の良否ではなくて、女王蜂である天皇が存続し、日本復興に必要である女王蜂が生き残って敗戦と共に復興の種子が蒔かれている事である。日本復興の為に必要な女王蜂は各地、各業種に巣を持っている。その女王蜂の多くが存続し、日本を復興させた、と言っても良いと思う。天皇は女王蜂としては特に大きい中の一匹であるから天皇を先ず引き合いにした迄である。大体帝王業は私も就職したいと思っても、普通の人には出来ない事であると共に、一度就職したら退職は自由勝手に出来るものではない。敗戦に依る帝王業の退職は死を意味する。その廃業が外敵に依るものであっても、内乱に依るものであっても死を免れない事は近代史では先ず例外がない。

内乱に依って廃業させられた帝王は総統と言う名の元首であっても国外に逃亡して薄暗い余生が送れたら幸運の方である。

4 天皇制に例えたら、我等庶民と何の関係があると言うなら、日本はポツダム宣言受諾後、日本国として破産宣言を受けなかった。大体天皇陛下を許して下さい、天皇には罪はありません、と言う条件がついたらもう無条件降伏ではない。しかし、先に話した様に女王蜂が日本各地に生き残った、これは条件ある降伏より有利な結果を残していた。

5 では破産宣告とは何か？ 自然人の破産宣告を見聞した事がある。私の故郷で破産宣告を受けた人がいた。旧日本時代の法律によって正式に宣告された破産宣告である。或る日、町を歩いていたら債権者に発見されて派出所に連れられ、彼は何月何日第何号の判決で破産を宣告された男である。自分を確認された後、背広は脱がされ、靴はボロゲタを渡され、見ちゃおれない姿で家へ戻された。人権や人格等、何もあったものではない。破産したら貧乏になっても乞食同様だと言った程度ではない。日本の新しい法律はどんなものか知らないけれども、会社が倒産した場合、その社長が新しい会社を組織して再度社長に就任する事は当分の間出来ないものである。手形不渡りで会社が倒産した際、自殺して債権者に詫げる社長もいる様だが、その実、人間として生きて行く気力を喪失したのだと思う。自然人として破産を宣告されたら、乞食同様と言う様な生やさしいものではないのだ。

現在シンガポールでは破産宣告をされた人はナイトクラブにも行く事が出来ない、友人がご馳走しようとして一寸しゃれた店さえ案内しても、いやがらせをする人が出て来て、お前はこんな店に入る資格はないはずだ、とやれば、おとなしくしてその店を退出せねばならない。自分の一生はそこで終点に到達し、乞食以下である。私が中学校に入る時、小学校校長内申書の外に村長の証明書が必要であった。全家族の戸籍謄本の後に「破産宣告を受けた事なし」と大きい字で書かれている。大人になっても理解できなかったこの言葉を振り返って今にして思えば、君の親が破産宣告を受けてあるならば、中等学校以上の教育を受ける資格がない事、と言う意味がはっきりする。自然人として破産宣告されたら、その祟りは子孫にまで及ぶのである。

6 国家として破産宣告は国際法上ないが、その効力は自然人の破産宣告に匹敵する方法と効果があるのだ。九州、四国、本州、北海道を米、英、蘇と中国で分割占領しようとした計画があった事は日本人の多くが知っているだろう。かかる保証占領を免れた事は日本人の幸せであり、日本国の勝利の基礎となった。黒ちゃん、白ちゃん、赤ちゃんと五色の人間が日本人口の多数を占めたなら、経済大国日本はおろか、見るもおぞましいこれら五色の人間を如何に処理するかで頭を痛めるであろう。ドイツ人は団結心の強い民族

であるが、今でも東西に分れて、ドイツは一つになれない。

五色の人間が日本人の多数を占めていたら、大和民族は亡び、会津長州のいがみ合いも自然消滅せざるを得ないであろう。そんな不幸な民族にならないで、今日に至った事は、ポツダム宣言を受諾したその時点で素地が作られた。勝利の第一歩である。苦々しい気持もするであろうが、各地、各階層に残された大小色色の女王蜂が巣造りを出来る様に神様が手配してくれたのだ。

7 勝利への道程は遠く、日本人の勤勉が幸いして、着々と復興の道を歩み出した。これは日本が徹底的に惨敗した賜物であると思う。何故なら、日雇人夫の息子が人夫をやっても別にどうと言う特殊の感触はないであろう。明治以前日本は後進国と言うよりか、野蛮人に近いと世界から見られていた。それが明治以後、余りにも調子よく、明治45年プラス大正15年、合計60年で世界の五大強国にのし上がったのである。草履取り木下藤吉郎が関白豊臣秀吉に出世した位の大出世である。この際注意せねばならないのは成金根性である。秀吉は朝鮮征伐に失敗したが、大日本帝国は日韓合併で朝鮮半島を併呑し、更に満州国を建国。実にこの世の栄華その極みに到達したと言ってもよい。大東亜戦争の中堅分子は、明治成金親子の子や孫である。日本が生半可な負け方をしたならば覚悟が不足であるから「売り屋有りますと唐様（からよう）で書く三代目」になり果てたかも知れない。幸か不幸か大日本帝国の最後は傍目（はため）で見てもかわいそうな位の惨敗振りであった。瓦礫の山に立たされた三代目は売り屋も貸し屋も残されていない事を自覚し、草の根、木の皮でもかじって命をつなぎ、国造りが始まったのである。日本の国民全体が乞食になり下がり、バタヤになり果て、努力したのである。その結果はバタヤの集めたクズの山から選び出した部品で精密機械を組立て上げた程の奇跡的成功をしたのである。実に日本人はよくやった。

天は自ら助くる者を助けると言う。神は日本を見捨てずに朝鮮動乱、ベトナム動乱が発生。日本では神武景気の嵐が吹き、乞食の子日本は富豪の青年に成長した。多少の白ちゃん黒ちゃんは、いるにはいるが五色の大和民族に成り果てる事もなく、経済大国日本は戦勝国の実質を供えている。少なくとも戦勝国を自称する幾つかの国より豊かで、先進国らしい生活を国民がエンジョイしている。現在の日本人は戦勝国の人民と肩を並べて酒杯をくみかわしても、ふところの暖かいお金持ちさんであるのだ。

8 戦争目的を遂行出来たならば、戦勝国と言う事が出来る。この角度からもう一度第二次大戦の結果を検討して見よう。盧溝橋事件に端を発した北支事変は日本側の隠忍自重の甲斐もなく、支那事変までに拡大され、支那全土に戦場は及んだ。日本は東洋平和の為、正義の為、膺懲の剣を取り上げ、支那兵を掃蕩したのである。最初からその言い分は少しおかしいと思わないかね。支那と言う国名は世界にはないのである。大日本帝国をジャップと言うのに等しい。

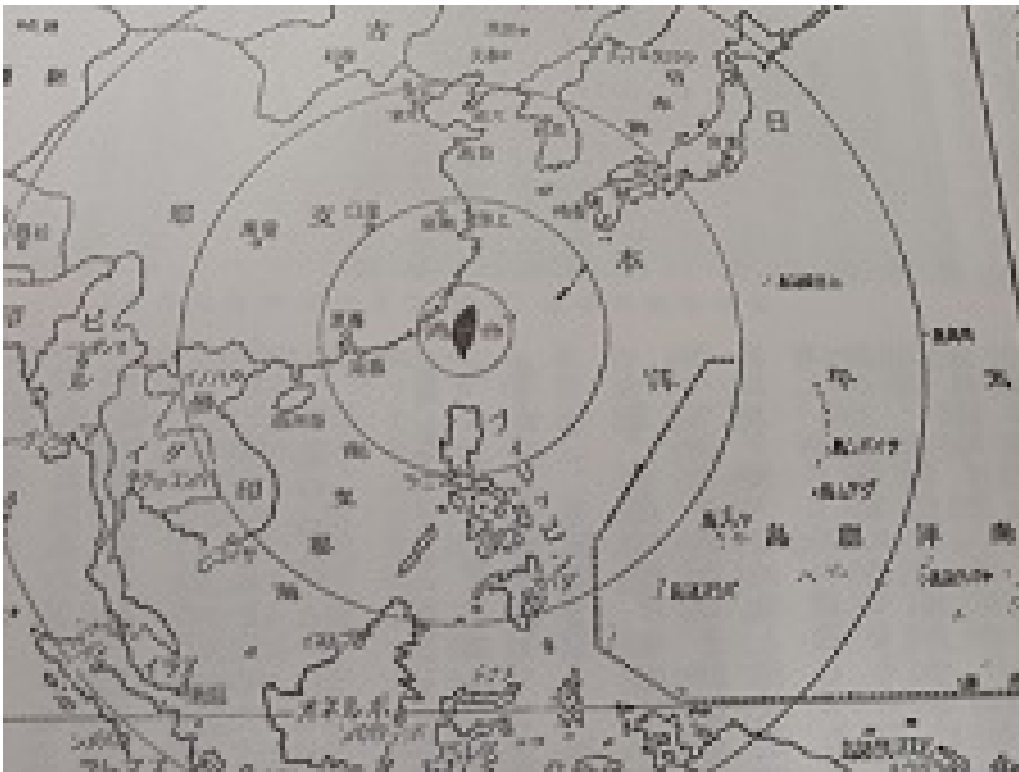
ところが支那兵は思ったより粘り強く、支那と言う国は侮り難い国力と国土の広さを持っていた。困惑した日本は、蔣政権を相手にせず、と宣言したが、本当は疲労困憊（こんばい）に達し、進むに道なく、退く方法もなかったのである。その上、英国、米国が中国に味方して、日本に対して経済封鎖をしたのである。泣き面に蜂とはこの事で、弱みも言えない。人の弱みにつけ込む米英両国はまさに鬼畜にも勝る行為であるとして、鬼畜米英に対し日本は宣戦を布告したのである。主戦場であって、長期作戦をやった支那である中国に対しては最初から最後まで宣戦布告がされていない。しかし終戦と同時にした降伏は、相手にしなかった蔣政権に対しても、手続き通りにお行儀良くやっている。第二次大戦は最初から最後まで不可思議な戦争であったのである。

戦争目的もその時期により、修正が行われている。盧溝橋事件においては演習中行方不明になった日本兵士の安全を守る為、いわゆる支那兵の駐屯地を含めた捜査であった。中国の土地で日本兵が演習し、中国の兵管内に日本兵がいないか調査させてくれ、とは正に傲慢と言うか不遜というか？ この正義の国日本の要求にこたえられなかった支那兵は膺懲すべし、とした日本は立ち上がったのである。在留邦人保護と権益擁護の為、日本はやむを得ず出兵せざるを得なくなったのである。東洋平和の為日本はやむを得ず兵を動かしたのである。悪人は支那兵であって、日本ではないのだ、と自己弁護しながら、戦争は次々と拡大され、中支、南支に及び、支那事変と命名された。泥沼にはまり、進退両難、遂に蒋介石は日本が無条件で撤兵するならば、過去は不問にしようとして声明した。

9 しかし日本の軍隊には退却と言う字はなかった。米国の様に自分のために有利と判断した場合は、朝鮮半島からでも、ベトナムからでも引き上げて行く勇氣も聡明さもなかった。日本は汪兆銘氏を擁護して新政府を設立、新中国政府の成立となり、支那と言う言い方は少し謹むようになったが、支那事変は最後まで支那事変であった。この頃の戦争目的は王道楽土を中国に建設し、中国民衆の為、東洋平和の為、日本は血と汗を流して戦争したのである。その内容は、第二の満州国を作り、中国全土に平和な中国を建設する事である。如何に馬鹿な支那人であってもその手に乗る筈はあるまい。

10 犬は如何に素早くても、のそりのそりとした牛とは体質的に違う。犬が吠えたら牛は逃げ出すが、牛は攻撃しなくても、寝返りした時犬が下敷になっただけで、一卷の終りとなる事をお互いに知る様になった。牛は悠々と草原の草を食べ、犬は秋田犬の遠吠になってしまった。秋田犬が如何に一生懸命吠え立てても結果はなく、ビルマルト等の建設で牛の栄養は益々良くなるばかり、米国等の経済封鎖は益々厳しく、犬はやせていくばかり、今まで馬鹿にしていた支那人のいる支那大陸で野良犬になり果てる前に何とかせねばならぬと考え出したのが大東亜共栄圏の建設である。そして、大東亜共栄圏の建設が第二次大戦の最終目的となり、指導原理となった。大東亜共栄圏の建設が成功したならば、日本の戦争目的は達成し、

日本は戦勝したと言う事が出来る。



11 大東亜共栄圏とはどんなものであるか、少し復習して見よう。我等東洋人は皮膚も同様に黄色であり、宗教も似ている。各民族は皆自立し、民族自決で白人の搾取から逃れるべきである。その為には日本を盟主とし、大東亜に於ける各民族は独立国家を作って共存共栄しよう。その方法としては；

1. 中国は外国の租界を廃止し、中国から治外法権を追い出し、中国人の中国を作る。

(注) 当時上海等の大都市には租界と言うものがあって、公園の入り口には「支那人と犬は入るべからず」と言った立て看板を立てる等、大変な横暴振りであった。

2. 香港、マカオは九十九年租借を中止して中国に返還し、中国領土の保全を計るべきである。

(注) 香港は英国、マカオはポルトガルの支配下にあった。

3. 仏領インドシナは独立してフランスを追い出し、マライシヤ人の国家にせねばならぬ。

(注) 現在のベトナムは当時仏領インドシナであった。

4. 英領インドシナは独立し、英国人を追い出して現地人であるマレー人の国家とする。

(注) 英領インドシナはシンガポールを含む現在のマレーシアである。

5. ジャワ、スマトラ、セレベス、ガリマンタン、ニューギニアはそれぞれオランダ、英国から独立して、自身の国家を作る。

(注) 後日終戦と同時に独立戦争となり、成功してインドネシアと言う国家が成立した。一小部分(サバ地方)はマレーシアに帰属してしまった。

6. フィリピンも独立してアメリカの支配から離れるべきである。
7. その他、カンボジア、ビルマも皆白人の支配から離れて自分達の国家を作り、幸せな生活をするべきである。
8. インドも独立して英国の支配を離れ、インド人のインドを作るべきである。

(注) この頃は日本の旗色よろしく、マライシアを制覇し、シンガポールに到達し、ビルマ攻略を準備していた頃に追加された。

そしてインドのチャンドラボースと言う革命家が大活躍していたが、彼は台北の松山飛行場で事故にあい死亡している。皮肉にも墜落した飛行機は台湾神社の新殿を焼き、

御神体まで灰塵に帰した。それ故明日行かう予定の遷座祭は中止せざるを得ない羽目になった。それ以降、皇軍の進軍は思う様にならず、ビルマ経由で印度の入り口まで進出したが、敗色濃厚となり、やがてニューギニア、ガダルカナルの悲劇となる。

以上が大東亜共栄圏の構想であり、指導原則である。鬼畜米英に対する宣戦の際、大いに宣伝されていた。第一次世界大戦の発端がヨーロッパの一小国家、実に正々当々とした正義の聖戦であったのだ。

戦後四十年になった今、回顧すれば、日本の理想は完全に成就し、目的は達成されている。しかもその速度は早く、その成果は予想以上である。前記八項目の内で独立、自決政府を樹立できなかった国は一つもない。それも終戦とほとんど時を同じくしている。その上にオマケがついて、ビルマもカンボジアも独立し、朝鮮半島まで独立して自立した。世界が肯定しようが、しまいが、現地の人々が感謝しようがしまいが、事実は事実、鉄の事実である。日本は第二次大戦に於ける目的を達成し、当時の合言葉である、八紘一宇の理想が完成されているのだ。戦争目的を百%以上成功させた日本が、何故敗戦国であるか、日本は正に自身を犠牲にした戦勝国であったのだ。

12 しかし日本人はこの話を聞いても耳が痛いであろう。諷刺されていると感じるであろう。けれども私は本気で言っている。大体、人間と言う動物は二枚舌を使って、表と裏の顔がある動物である。自分の利益の為ならば、自分の悪い事でもそれを美化する、そしてもっともらしい理由を造り上げて行く。仮に私が日本人で、以上の事を話したら、藤尾文部大臣の様に国外から批難され、うぬぼれ野郎が何を吠えている、と他国人に言われなくても限らない。しかし、外国人である水方某がこんな事を話したとなると、何かの時に引用されたり、悪用程度でなくとも利用される可能性はある。日本人は全体として世局にうとく、世界の姿を正しく判断する能力は案外と低いのである。良く言えば単純、正直、悪く言えばおバカさんで自己主張が出来ない。「いけません」と言われたら、不満であっても無言で大人の言う様にしてしまう子供の様な性格を帯びている。国民全体とし

てであって、日本人個人に対する批判ではない。

第二次大戦で日本は政治的目的を得たが、政治的熱情を失った。そこで私はここに第二次大戦に於ける日本の裏の顔を素描し、日本が終局的にやはり戦勝国であった理由を分析すると共に、去勢された日本に栄養を補給して、早く元気が回復出来るよう激励したい。日本人全体として大多数の日本人がいまだ肌身に感じていない新事実がそこにあることを。

聖戦と唱えた第二次大戦はその表の顔が如何に美しくとも、裏の顔は醜いのである。八紘一字を唱え、民族自決、東洋平和、大東亜の共存共栄を如何に宣伝しても、それは子供だましであって、日本の腹の底は見えすいていた。事實は、日本は自己の為に権益の伸張を計り、国土の拡大を願った戦争であった。満洲国を建設したのもその為であり、支那事変も要は中国を殖民地化したかった為である。即ち豊かな広い日本を造る為の戦争であった。北進しようか、南進しようか、軍部には二つの派閥があり、最終的に南進説が採用された。大東亜共栄圏はうわべの姿であり、美辞麗句を並べた文章であり、絵に描いた餅にしか過ぎない。腹がへったからと言って、日本人以外は食べられるものではない。大日本帝国の本当の念願であった国土の拡大、権益の伸張は、戦後どうなっているか、検討して見よう。

13 敗戦した日本は終戦と言う言葉におきかえて自己を慰めてしまったが、失ったものも多い。領土は南樺太、朝鮮半島、台湾、澎湖島、千島列島、及び南洋委任統治地等を失ってしまった。日本の国土ではないが、食料倉庫であり、殖民地的存在である満洲国もなくなってしまった。もとの木阿彌に帰った日本の国土は明治以前の状態になってしまった。しかし日本は徳川時代に復帰して、侍の「ござる」「そうろう」の時代にならずにすんだ。

14 日本には偉い人がいた。偉い知恵袋がいたと言った方がよいかも知れぬ。その人の名前を指名出来ないが、憎らしい位偉い人がいて、素晴らしい事を考え出し、それを実行したところにその偉さがある。国亡びて山河有り、と言う意味は、故郷の山河が残されている、と言う意味に日本人は解釈せず、新しい山河を持つ、と言う様に切り換えたのである。

二十年位前から南米のブラジルに移民を開始している。一家族十万ドルの四ヶ年間無利息借款で、集団移民をやったのである。何だ、移民か！ と馬鹿にするかも知れないが、彼等が経営する農場は一箇所が九州や四国に相当する面積である。台湾より広いのだ。それが二ヶ所や三ヶ所でなく、三位数を数えるのである。毎月一回専用船舶一隻で五千家族がブラジルに移民されている。そして、パラグアイ、アルゼンチンにも移民されて来た。農民を主体とした日本人は南米で新日本を建設中である。危険を感じたアルゼンチンは最近集団移民をストップしたらしい。古代神話で大国主尊（おおくにぬしのみこと）の国引きが出て来るが、戦後日本は昭和の国

引きを実行し、成功している。南米に九州や四国の面積に相当する新日本が百以上も誕生し、二十歳近い青年に成長している。

アメリカにもこの方法が施行された。そしてアメリカのある州で集団移民を行い、成功したのが一ヶ所か、二ヶ所ある。日本の国家経済力が後ろ盾になっているのだから、成功率は高い。それ故先進国であるアメリカはすぐ気がついた。現在アメリカでは日本人の個人移民は許可されるが、集団移民は禁止されている。しかしもはや後の祭り、新日本国は南米に北米に誕生し、青年になりかけている。その総面積は日本の何倍に相当するか、知る人は少ない。ハワイでは多数の議員を選出し、政治上で羽振りをきかしている。州知事も日本人の後裔であると聞く。耕地面積も日系の人々で全体の半分以上を持っているとの話である。真珠湾を奇襲せずとも、戦後日本人は実質的にハワイを占領したのだ。

これ等移民日本人は正真正銘の忠良な日本臣民である。善良な日本の風俗習慣を継承し、日本人的特質を守り通してくれる。日本の旅行者がロサンゼルスで「居合術御指南つかまつり候（そうろう）」という立て看板を見て驚いてしまったという話を聞いた事がある。やがて汚染された日本は以前の日本でなく、日本らしい日本が見たければ、国外に出なければ、と言う日が来ないとも限らない。

戦後日本の国土は拡大された、と言う私の論点に異議ある者は、多くあるまい。ならば日本の腹の底にある領土拡大の野心は成就し、野望は成功したと言っても良い。

今度こそは本当の進出であり、侵略と言われる心配もない。第二次大戦の戦勝国、日本おめでとう。新日本の建国成功おめでとう。

第二章 回顧

韓国と北朝鮮

現在南北に分れている朝鮮半島はその昔、三韓と言って、馬韓、弁韓、辰韓と言う三つの国から成り立っていた。又の名を新羅、百濟、高麗と言う。それが統一されて朝鮮王国となり、ちゃんとした国王がおり、徳川時代には清の属国として礼を取った立派な独立国である。

体質的には現在のタイ国と余り変りがない。日清戦争に依って国力が伸長した日本は日本の生命線として主張する様になった。日露戦争で勝利した日本は、南満洲鉄道の利権を得、大連、関東州を入手した。朝鮮半島は通路となり、朝鮮半島は益々日本にとって生命線である意義が強化されて行く。世界の大国ロシアと清国を打ちまかせた大日本帝国である。朝鮮王朝には打つ手がない。合併しましょうと言われても、「いやだ」とは言えない。征伐されて、亡国の憂き目を見る事は見えすいている。

朝鮮国王は泣き泣き日本の養女となり、人質にされた様なものである。最初から平等な立場で合併されたものではなく、日本に併呑された、と言った方が真実に近い。平等であれば、南北朝時代の様に天皇を交替でやっても良い。しかしこんな不遜な事を言い出す朝鮮人がいたら、きっと命を落とすであろう。せめて朝鮮総督の任命ぐらには朝鮮王である李王家の裁可を必要とする位の事はあっても良かったはずである。そして朝鮮総督には朝鮮人の一人や二人は任命しても良かったはずである。要するに朝鮮王は皇室として礼遇されたが、直宮（じきみや）の三笠宮の下であり、終戦後朝鮮王室の安泰を考えた日本人はおろか、外国人もいなかった。朝鮮王室は日本に寄生した廃帝に過ぎなかった。しかし、朝鮮人は朝鮮王室の捨て子ではないのだ。彼等の関係は生木（なまぎ）を裂かれた恋人同志であり、親子の情が深い。文章の上で如何に合法的に書かれても、その実質は併呑であり、感情的にも、政策的にも、それは朝鮮人の目から見れば侵略に間違いはない。

今日本で、又は南韓で、朝鮮人と言ったら叱られる。何となれば、朝鮮と言えば北を指し、南は韓国と言わなければならない。彼等は水火相入れぬ仲であり、何時果てるとも知り難いがみ合いを続けている。日本人にとって、南は天国、簡単に女遊びの出来る處であり、北は日本に一番近く、又一番遠い国である。入国したければソ連のモスクワでビザを取り、始めて入国許可が出る。世界一周に匹敵する距離を飛ばなければ行く事が出来ない。その上、両国の国情は相入れない事が多く、同じ民族でありながら、南アフリカ聯邦に於ける白人と黒人とのいがみ合いに勝るとも劣らざるものがある。かかる異質の両国家でも、日本を恨む事となれば一致し、

足並みは揃って行く。何故、南も北も、揃いも揃って日本を敵視し、戦後四十年を過ぎた今になってもそんなにしつこいのか？ 少し検討して見よう。

商用の為、北鮮に行った日本人がいた。北鮮は恐ろしい所です。社用で派遣されたが、止むを得ない限り行く様などころではないですね。とお土産話をしてくれた。事務所の壁に金日成の写真がある。この方が金日成閣下ですね、と指で指した。大変叱られたが、総統か総理を閣下と言ったので悪かったのだなと思ったが、本当の理由は良く知らなかった。後日になってから人が、金日成の様な民族英雄は崇拜的であるから、指で指すのは失礼も甚だしい。右手を左肩にもって行き、斜め右側におもむろに落として、写真そのものを指ささず、写真の付近に手を持って行く、のが礼儀である、と教えられた。難しい礼節である。西洋映画に出て来るお姫様に求愛するポーズであったのだ。昭和ニケタの方々が吹き出しそうな話である。

仕事のあいまには映画を見せてくれる。日本人が朝鮮でどんな横暴に朝鮮人を虐殺し、酷使し、虐待したかの記録映画ばかりである。そしてその度に感想は、と聞かされ、始末書の様な感想文も書かされる。或るとき小さな洞穴に連れ込まれて、この穴で百何十人と言う朝鮮人が日本人に焼き殺されました。この壁にはその焼き跡が残っていて、土の色が赤茶がかかっているでしょう、と言われたと言う。百人も人をつめ込む事は出来そうもない小さな洞穴ではあるが、ハイハイと答えざるを得なかったと言う。私に、彼等に問われたとき、君ならどう答えるかと聞かれた。君はどう答えたかね、と私が反質問したら、下手な答え方をしたら日本へ帰国させてもらえなくなるかも知れない、と思ってビクビクしていました。私は戦争中、子供でしたから良く知りませんと答えたらこれはだめ。本当か嘘か知らない日本人は怪しからんですね、と答えようかと思ったが、先ず「本当か嘘か知らないが」でしごかれそうである。日本人は怪しからん、と言うのも、自分が日本人であるから言って良いか、悪いか、戸惑ったと言う。私はこの青年に、大阪商人を見習うのですね、と建議した。大阪の人は出会い頭（がしら）に「儲かりまっか」と挨拶する。お早よう、に相当する。その返事は「いや、ボチボチ」である。商売は上がったります、とか、儲けはありません、では馬鹿にされる。大変儲けています、では妬まれる。それで当たり障りなく、ボチボチとごまかしてしまうのである。実はサインブックがありまして人まねで「戦争とは残酷なものです、いやになりました」と書いて許してもらいました。貴方の言うボチボチですね、貴方はやはり偉い、とほめてくれた。いやいやおおきに！

南朝鮮半島である韓国はいかかなるものか？ 少し検討して見よう。先ず道路で見られる看板は韓国語で書かれているから、韓国人以外で見て理解出来る人は少ない。日本語は全く通じない。彼等は日本語を知らないのではなく、知っていても話さないのである。商用で日本語を使用すれば金儲けが出来るから、その時は良

く通じるが、そうでない時は日本語を知らない。

しかし日本の鼻下長井君にとっては、韓国の若い女性でも日本語が上手で、情は濃（こまや）かであり、下着迄洗濯してくれ、帰国の際は空港まで送って来て、何時又来てくれるの、と涙を流してハンカチを目にあてる場面に出会う。それで日本から来た鼻下長井さんは財布の底まではたき出されるはめになる。

韓国の女性は貞操観念が強いのが本当の姿であり習性がある事も、日本の人は良く知らないのである。国が貧しいから、売れるものがあれば、何でも売って金にするのである。外貨獲得の為に船積みした後れそうなコンテナの荷物を警察の車で前導して港に送り届ける位の熱心さだ。新しい機械を輸入しても工場の建設が完了する迄待つて居られない。工場の建て物を建てているその庭先でテントを張って、機械の組立てを完了し、生産が開始される程の勤勉さである。その心の奥には、何くそ、日本に敗けるもんか、日本を見返してやれ、と言う闘志がみなぎっている。

では朝鮮半島に於ける人達が日本に対する怨恨は先に挙げた例で南と北を足し合わせて二で割ったら良いかと思ったら大間違いである。むしろ、南北の例を足し合わせて何倍か掛算をしなければならぬかも知れない。そして時と共に薄れて行くかも知れないが、それは20年、30年で消失する性質のものではなく、一世紀、二世紀かけても解消出来るか否かの問題であると、私は思うのである。何故か、それは日本人的性格の欠点と朝鮮人の生活様式、物の考え方、及び地理的条件に起因するものと思う。

日本人は徳川の鎖国時代から身分の区別が余りにも厳しかった。士農工商と分けられて、武士が最上位にあり、商売人は下賤とされた。

三百石、五百石の侍は大身の方で、三十石、五十石でも大威張りである。

（一石は一斗の十倍で約一八〇リットルに相当する）家来を持っては粥（かゆ）もすすれない。所が徳川末期になればなる程、何石何人扶持（ぶち）と言っても額面通りにいかず、何石かはもらえなくなり、五百石は持分であって、実際には四百石しか頂戴出来ないと言うのが実情であった。しかし三人扶持とついでいれば家来を三人雇用せねばならない。生活は苦しいのである。侍は尊厳を保つ為、色々の禁令を出し、町人は金があっても絹物は着用出来なかった。

土佐で士分取り立て、下駄穿き御免と言えは大変な出世であった。無禄の浪人であっても、傘張りで細々と暮し、威張り散らして帰農しなかった。人いじめではあるが、この制度は徳川三百年継承され、質実剛健が美徳とされ、消費生活は許されなかった。

明治、大正、とずっと続き、昭和の時代までも、旧制高校生は弊衣破帽が制服であり、武家時代からの質実剛健の遺風を知らない外人の目から見たら、実に不可思議な乞食

姿であったのである。家督を相続出来ない武家の冷飯食いの二男、三男坊は、商家の婿養子になって生活の安定を計ったが、それでも手代番頭に対して町人呼ばりし、威張りちらし、親に当る岳父である店主も婿殿と呼び、下にもおかない持て成しであった。この婿殿達は能力も低く、剣術も大した事ではなく、穀潰（ごくつぶ）し的存在ではあったが、用心棒としての用はある程度役に立った。その中、侍と商人の距離が段々と接近して、商人の機嫌も多少は取らなければならぬとなった。非人と言う階級の発生原因ではないかと想像する。

非人とは士農工商の又下であり、人権が認められない犬猫と同等視された人種であると思えばよい。何時から発生したか、定かではないが、姦通した女、相対死の片割れ（即ち心中の死にそこない）は非人に落される。商人の機嫌取り、と想像される理由は、南蛮と通商のあった薩摩である現在の鹿児島には非人の子孫である、同和と言われている村の人はない。藩主自身、侍と共に貿易をし、商業行為があったので、商売を賤業とは思わなかったからであると思う。明治維新後、廃刀令が施行された後は、侍と言う階級も業種もなくなった。庶民にも苗字が許され、士農工商皆一視同仁、と言う文明開化の時代が来た。生活能力のない武士階級にとっては胸くその悪い事であり、戸籍の上だけで士族、平民、と分けたが、その実は皆浪人になってしまったしかし、非人だけは取り残されて、新平民、と言う烙印が押され、穢多（えた）と呼ばれ、良い職には就職出来ず、良い教育も受けられず、戦争中は兵隊に取られても、弾丸よけ役の本当の陛下の御盾にはされたが、将校にはなれなかった。徳川時代に発生した非人が明治以降新平民となり、昭和 60 年代の現在、やはり同和の人々と言う名で岐視されている。かかる歴史の流れを持ち、かかる国民的の共通した性格を持つ日本人が、外来民族である、朝鮮から来た人々に対する包容力は絶対にあり得ない。

朝鮮人として日本で問題になるのは、明治末期、大正初期に渡日した人々で、なかなか融合出来ない事である。皮膚の色は問題にならないが、他に致命的な欠点を持っていた。濁音の発音が出来ない事である。硝子はカラスとなり、バカヤローはバカヤローになるので、すぐに違和感を作る。香辛料である胡椒をペロペロと舐め、唐辛子をガリガリと食べる。故郷の生活苦を逃れて日本へ出稼に来た者が多く、すべて貧乏人であり、教養の高い筈はない。ちゃんとした職業にありつく事は困難であるから、先ず日本人がいやがる、バタ屋からクズ屋、便所の汲み取りまで引き受ける。食べ物は内臓から四つ足まで食べる。日本人の目から見た朝鮮人とは、賤業についている穢多であり、水平運動を口にする事さえも出来ない賤民であり、非人であったのだ。

かくて、関東大震災の際には、井戸に毒を投げ込んだ、と言うデマが飛び、多くの朝鮮人が理由もなしに撲殺されたのである。戦争中は朝鮮本土で、重労働を科せられた。その様子はアフリカに於ける土人狩りに勝るとも劣らざるものであり、女性は軍隊の慰安婦にされた。その殖民政策は苛酷で、大正年間に於けるバンザイ事件は、平壤付近から発生した百姓のデモであり、税を下げてくれ、との要求であって、只

日の丸の小旗を持ってバンザイバンザイと歩き廻っただけの話である。しかし、朝鮮人の出した犠牲者は何と五万人、と日本の記録に残っている。

朝鮮人民共和国であろうと、大韓民国であろうと、彼等が受けた屈辱感は深く、国王を尊重する、しないに関係なく、朝鮮王朝の滅亡は、女房を寝取られた男の気持であると表現しても過言ではない。

条約が如何に合法的に作成されていても、それは受け入れられるものではなく、事実は強者に征服された弱者であったのだ。

南京大虐殺

「南京大屠殺はなかった」と言う発言に対して、私見を述べよう。

南京屠殺は戦後始めて言い出された話で、戦時中にはこの話はなかった。当時外務大臣であった広田弘毅がA級戦犯として、只一人の文人として処刑されている。

これも合法的であると、藤尾大臣、新聞で発表したら如何ですか。貴方の家には石の礮（つぶて）が飛び、窓ガラスが何枚か、破れる事でしょう。

広田氏は二二六事件の生き残り組で、軍部に対立した人である。例え、南京大屠殺があったとしても、外務大臣が軍部を統率、命令する能力も権利もない。その彼が何故、南京大屠殺の責任を問われ、死刑になる理由があるかと、私は同情的な見方をしている。

聯合国の司法官がやった裁判であるから合法的だ、と言えばそれまでだが、承服し難いところがある。

南京大屠殺はあったか、なかったか？ 中国から来た人に直接聞いたお話では、日本人

が入城してから三日間、大暴れし、婦女子は暴行され、老若男女を問わず、皆殺しにされた。水道の蛇口から出る水は紅く染まり、その惨情は例えようもなかった、と話している。しかしこの人は当時北京に居た人から聞いた話である、と付け加えている。北京にいたから死なずにいたが、南京にいたら死んで居ただろうと脅えていた。その表情に虚偽はなく、少なくともその人自身はそう信じているとしか受け取れなかった。しかし冷静になって考えなおすと、人間一人の血液の分量は何十リットルもあるわけではなく、中国側の言い分である犠牲者二十万人を皆水源地に集めて一人ずつ血をしぼり出してもプールより何倍も広い貯水池を満たす事が出来るか、と言う疑問が先ず浮かぶ。それが何百メートル、何キロメートル先の水道水まで紅くなると、なおさら信じられない。南京の町全体が臭気プンプンとして、屍臭が充満していたであろう。当時は英、米、仏等各国とはまだ戦争状態になく、外国人の目にもふれず、新聞記事にならなかったはずはない。蛇口から出た紅い水はさびた鉄パイプの錆びではないかと考えた方が合理的であると思う。でなければ中国側の戦意高揚を意図した誇大宣伝であると判断した方がいい。

戦後南京大虐殺を研究した記録を私は見た事があった。その研究結果は、南京を攻撃した部隊は南京に入城出来ず、すぐ他所へ転進し、新しい任務に就いた。部隊名から

日付まで明確にある戦記である。この本では、正確な時点から中国側の動向まではっきりしている。実際は日本軍の進撃が余りにも早く、中国側は対処の方法がなかった。旗色悪し、と見た中国側の大官は我勝ちにと、いち早く後方に逃げ去った。残された軍隊も上層部から逃走し始め、気がついて見たら上官はいなくなって、指導者がいない。戦争どころの騒ぎではない。後方へ撤退するには渡河口しかない。それ故渡河口に向かって自然的にこれらの落武者が集まって来た。揚子江は対岸が見えない海のような所である。泳いで行くと言うわけにはいかない。完全に敗残兵になり果てた彼等は船もなく、食べ物もなく、日本軍に投降したのである。この捕虜は最初は優遇された。しかし捕虜の数が急劇に増加し、一小隊で一大隊の捕虜を管理するようになってしまい、飯を食べさせる為に日本軍全体が炊事兵になり下っても、飯さえ十分に捕虜たちに食べさせることができなくなった。その上捕虜は続々と増加し、日本軍は手を上げざるを得なくなった。日本軍は自身の安全が心配になり出した。敵味方入り乱れた中で、敵は絶対多数を占め、拳と手で向って来ても日本軍は殲滅される恐れがある。その上、捕虜は続々と増加して来る。そこで捕虜を持って余した日本軍は彼等捕虜達を殺してしまった。日本側でのこの調査記録は中国側の言う人数と大体合致するから、信憑性は強いと思う。

南京大虐殺は有ったか、なかったか？ 私は非戦闘員の虐殺が全然なかったとは思わない。それは想像しただけでもあったと私は断定する。それは日本旧軍隊の体質を知っている人なら、私が軽率な断定をしたとは言わないでしょう。しかし、水道の蛇口から血の水が出る程、非戦闘員の大量虐殺があったとは信じられない。しかし南京郊外の渡河口で捕虜の大量殺戮があった事は、日本側の調査でも認めている。藤尾大臣はこれを知っていて「南京大虐殺はなかった」と話したのか、知らないで話をしたのか、知らないが、政治家としては軽率であり、芸術性に欠ける。

中国の国土は広く、スケールは大きい。捕虜虐殺の歴史なら、万里長城の建設で有名な秦が趙を滅亡させた時に、趙の捕虜を一夜に四十万人虐殺した記録がある。その事情は余りにも多数の投降者をかかえてしまった秦の大將白起が、歓迎会と偽って趙の兵士に酒を飲ませ、又秦の兵士には彼等が酔ってしまった頃を見計らって一人で二人以上殺せと命令し、実行した話である。殺された趙の兵士は四十万と記録されている。

戦記では三国時代、諸葛孔明が曹操の軍隊を破った赤壁の戦で、一両日の中に火攻めに遭った曹操の軍隊が揚子江の藻屑と消え、陸上に上がることが出来た兵士でも、孔明の軍隊の刀の錆になってしまった。その人数は七十二万と記録されている。弓矢刀剣を武器にしていた時代の事である。戦車、大砲、飛行機まで動員され、原子爆弾まで使用された第二次大戦の戦争に於いてすら、一回の戦争で一度に四十万、七十二万の人が死に絶えたと言う例がないのである。中国人が三万や五万、いや、三十万や五十万殺されても厳然として、蚊にさされたかな、と言わぬばかりにへこたれない民族であるのだ。第二次大戦で受けた

人的損害は、戦争を発動した日本よりも、その総数は多いのではないかと思う。
何故なら、戦場になったから非戦闘員の被害は殊の外大きいのである。

私は冒頭で述べた様に日本には、俺、貴様、で通じる友達が大分いる。同様に台湾海峡の西側から来た中国人の中にも親友、友人が大分いる。彼等は良く私に注意する。日本人と一緒にいるのは良いが、気をつけて騙されない様、気をつけなさい、と言い、「日本鬼」と呼び、日本に善人はいない、と断定する。日本一億の中に善人が一人もない事はあるまい、と彼等に説明するのは大変困難である。日本人はやはり日本鬼であり、悪人の集合体である。

何が彼等をそうさせたのか、普通のお友達付き合いでは、中国人が日本人に話さないお話として、真面目に聞いて貰いたい。そして日本人はこんなことをして、こんなくだらない事で何時までも恨まれ、悪名が消えない事情を理解して貰いたい。話の主は身元のはっきりした人々で、信憑性のある話、であると認めたから、例として挙げたのである。

総理大臣と靖国神社

中曽根総理が靖国神社に参拝した。前もってアンケート調査し、総理の身分で頭をちょこっと下げて来たらしい。憲法違反である、との声もあり、東南アジア諸国では軍備拡張の前兆だとして批判の声もあり、中共ではデモまであったとか。総理も一寸困ったらしい。こんな心安い呼び方をして良いか、悪いか、知らないが、中曽根さん、貴方も私も二次大戦の片棒を担がされた方で、お互い運がよくて参拝される方にならず、参拝する側に回っただけである。貴方の戦友の仲にも戦死者がいたと想像する。

その戦友たちに、運よく総理大臣迄出世出来ました、と報告しても罰が当たらないと思う。又二次大戦の戦没者に対し、貴児等は不運にして神と祭られたが、私は総理大臣になりました。今後は気をつけて国策を誤る事無く日本を指導します。どうか力になって下さい。とお祈りしても、これは仰いで天に恥じず、伏して地に悔いる事ではないと思う。

仮に中曽根さんがクリスチャンであって私に食事を招待されたと仮定を許されるなら彼は敬虔な気持ちで厳そかに神に感謝の祈りをしてから箸をつけるであろう。金をかけ、気を使って丹誠込めた私の手料理には、ただ最後に「ご馳走様」だけで片付けられる。また仮に彼が回教徒(マホメット教)であるならば、必ず二時間毎に休憩して神に祈りをささげるであろう。パキスタンで戦争したことから中曽根総理には好戦派だと非難するのは早合点と言うものである。軍備拡張と神社参拝は別世界のものである。次元を異にする。中曽根総理は総理大臣である前に、人間であるのが基本条件である。その信仰の自由は保障されるべきである。総理になったら神社参拝は禁止すべきという筈がない。それが憲法違反であるとすれば、それは憲法そのものが間違いであることを主張したい。人間として信仰の自由が保障できないと嘘である。

では靖国神社は軍国日本の聖域であるだろうか。物は見様で変わってくる。私は敢えて靖国神社を世界一大きいお化け屋敷と言ってみよう。不謹慎な!と怒らないで一寸話を聞いてくれ。

台湾で靖国神社に参拝した人がいた。参観に行ったと訂正しよう、売国奴と言われない為に。あった、あった、我輩も祭られていた、君もだ!と二人の戦友は、喜んだのかびっくりしたのか知らないが、二人とも靖国神社に祭られて

いた。この二人はフィリピンの戦場で戦い、最後は山全体が全焼した。全滅である。当時の言葉では玉砕と言っていた。この二人は奇跡的に死なず、ほかの部隊と合流し、その中に終戦になり、直接台湾に帰還した。それが戦死として取り扱われ、靖国神社に神様として祭られている。俺と君とは格が違う人だぞ、と時には私に冗談も飛ばす。俺は神で、君は人。福田総理も、中曽根総理も、俺の所へ頭を下げに来た、とカラカラ笑っている。しかしそれで身長も伸びなければ、体重の増減もなく、神様らしい顔つきもしていない。これが一部英霊の実体であるのだ。

明治この方、二百万以上の英霊が靖国神社に暮らしている事になる。少し人口過剰の模様だ。そこには、宮様もいれば、正一位勲一等甲一級元帥海軍大将山本五十六、という様にその名前より肩書きが長い人もいる。そして陸軍二等兵名なしの権平もいると思う。二百万人ものご飯、飯上げ当番は大将も二等兵も交替でやっているだろうか。片田舎のおじいさんが息子逢いたさに遠路、靖国神社にお参りしても、二百万人の中の一人を探し出すにはコンピュータでも使用せねばなるまい。明治時代の英霊は先任者として幅をきかせているだろうか。二次大戦で戦死した人は負け犬の様な格好で靖国神社に来たのだろうか。戦犯の汚名を着た東条英機は...

第二次大戦で英霊の数が急に増加した。神風特攻隊として、名実共に粉骨砕身、屍体の影さえ見当たらない人もいれば、ガダルカナルで餓死した人もいる。海で魚の餌になった人もいれば、人食い人種の調理材料になった人もいる。英霊の来歴は種々雑多で、戦死の状況を分類する事さえ困難な位である。生きていた英霊までいる事だし...。しかし二百万を越える英霊の中で、骨のかけら、髪の毛一本でも靖国神社に納められているのはどれくらいいるだろうか。招魂しましたので魂は靖国神社に来ています、と言うが、それが本当なら生きていた英霊は魂をぬかれている生ける屍か。護国の鬼もいい加減なものである。護国の鬼も二百万と集まれば一大世帯。鬼は又別の名をお化けという。それで私は靖国神社をお化け屋敷と言う事が出来ると言ったのである。英霊を軽視したり、侮辱する気持ちは毛頭ないから許して貰いたい。

靖国神社は明治時代に建てられた物であると思う。日清日露の戦役で、勝ち戦さの後は鼻息が荒い、と言う事もなければ、第二次大戦は負け戦さであるから、と英霊まで合わせる顔がない、とへりくだる事もないと思う。天皇の御親拝で感極まる事もなければ、今秋は総理大臣が参拝に来ないから、と気を落とす事もない。死んだ人は神であり、仏であるから何ら注文はしない。参拝してほしい、と言う要求はないのだ。九段の桜は春が来れば咲き、芝生は夏が来れば青々と茂ってくる。

日本人よ、もっと大らかな気持ちで温かく靖国神社を見守るわけには行かない

ものだろうか。死者の為に私はお願いをしない。若くして戦死した人たちは未婚であるから、子供のいない人も沢山いる。彼等の母はすでに老人になっていて、自ら孫なきを悲しみ、自分が死んだら位碑を見守ってくれる人がいない事を嘆いている。ああ、自分の死後、息子は無縁仏になってしまうか、と気をもんでいる。岸壁の母、は余りにも有名な悲話である。しかしいくら待っても死んだ人が帰って来る筈はない。その人たちの親なり、近親者には然るべき慰安があっても良い筈である。忌わしい戦争の思い出は真平御免、と言うなれば、戦争記念館と見るか、又は改称するか。そして花も蕾で散った若者に安らぎの場所を与え、後に残された英霊の母をこれ以上嘆かせないでほしい。

戦争にまつわる忌まわしい事や罪悪は許すべきである。しかし忘却してはならない。即ち、歴史上の誤りは許すべきであるが、忘れ去って同じ誤りを再度犯してはならないのである。

天皇

天皇は国民の税金で食べている様なものだよ。あんな大きい戦争を引き起こして、天皇に責任がないと言うのはおかしいではないか、と日本の若者は言う。それで年配の人に聞いてみたら、天皇制はやはり無い方がいいという。そこで私が言った。東京都千代田区一の一に大きな花瓶を備え、菊の一輪挿し、なかなか乙なものではないか、それ程悪くいうものもなかろう、と。ところが千代田区一の一が充分に理解できなかったようだった。それは皇居、即ち天皇の住所だよ、と話したら、本当か、とびっくりしていた。皆が悪いと言うから、お付き合いに自分も悪く言わなければならない義理はない。皇室とは何者ぞ。天皇何人ぞ。深く知りもしないで天皇を批判したり、ケチをつけている趣きがある。それで私、浅い知識でも良いから、私の天皇感を述べてみたい。

天皇は幕末から明治初頭にかけて、志士達が京都から東京に移植した盆栽である。盆栽には根があり、その成長を守り続けて来た人がいる。そしてそれは親から子へ、又その孫へと伝えられる。その保護も培養も間断してはならないのだ。人間の命より長い事が特長である。盆栽の命は、百年二百年と言うのは短命の方で、不注意で水を切らせたか、何かの事故がなければ、その命は長く続くものである。盆栽の寿命を維持する為には栽培主の間断なき丹精が必要である。生け花は美しく華やかではあるが、渋みがない。根がないから萎んでしまったらポイと捨てられる運命を免れない。だからといって盆栽にどんどん肥料を施して庭木になったのでは盆栽としての価値がなくなる。目障りになる事さえある。明治から昭和初頭にかけて、この盆栽は庭木になりかかった。肥料を施しすぎた栽培主の誤りであって、伸びた盆栽に罪を問うのは間違いである。国民が文明開化を謳歌した明治初頭から、日清日露の戦勝に気を良くした国民が、遂に天皇という盆栽を庭木に育て上げ、その枝は雲の上に到達するまでになった。肥料が多ければ伸びるのが当たり前であって、伸びた事を盆栽のせいにするのは間違っている。どんな肥料を施したか、その一部を回顧しよう。

「恐れ多くも賢きあたりにおかせられましては龍眼御うるわしく、昨夜は御ガスの排泄もあらせられ……」明治天皇御不例の病氣公報の一節である。その後を續いて、「その音響の勇ましき事、万雷一時に落ちたるが如く、その匂う事、フランス香水の如く、香ばしいかな。」とふざけたら当時の国情から推して只ではすまないと思像出来る。

内閣がありながら天皇御親政、陸軍省海軍省がありながらそれを統合する国防省はなく、皆統帥権を天皇に帰してしまった。陸、海、軍別々にある。枝が折れて落ちて来たら人を傷つける事を少しも考えないで、天皇の近くにはギロチンを据えつけたのは日本人全体であり、軍部一人のみを攻めるのは不公平と言うものである。

皇帝、国王、皆天皇と同義語である。アラブでは首長国と言って首長は国王を意味し、首の長い人の住む国ではない。スケールが小さくなるが、南洋の土人は統治者を酋長と言っている。昔、日本は天孫降臨によってできた優秀民族で、南方民族と北方民族の混血民族である事を承認しない。あなた方は南方民族と北方民族から成る混血児、雑種だよ、と言ったら殴られるだろう。天皇を酋長、首長、と言えば大変な不敬であり、不謹慎である。国王又は皇帝と称しても他国と同様になって雲の上に昇った感じがしなかった。それで明治以後、何かのいわれにもじって天皇と改称したのではないかと思う。私の想像した根拠を次に上げてみよう。

大東亜戦争の時十二月八日宣戦の大詔はついに下った。曰く、「天佑を保有し萬世一系の皇祚を踐める大日本帝国天皇は米国及び英国に戦を宣す。」から始まるなかなかの名文であった。これはお座なりの紋切り文句であった。日清戦争の宣戦布告では曰く「天佑を保有し萬世一系の皇祚を踐める大日本帝国皇帝は清国に戦を宣す。」になっていた。ヤクザが仁義を切る時も、天皇が宣戦を布告するときにも一定の形式があった。更に驚く事は日清戦争では皇帝といい、大東亜戦争では天皇と言っている。日露戦争も皇帝で形式とおりであった。日清戦争は明治 27、28 年、日露戦争は明治 37、38 年。明治は 45 年、大正は 15 年。明治 37 年迄は大日本帝国皇帝と言う呼称であったと思われる。何時から天皇という呼び方になったのか。確実な日付を私は答えられないが、昔々のその又昔からではない事だけは確信を持ってお答え出来る。

日本は朝鮮半島を併呑してしまった。朝鮮の皇室は皇帝と言ったか、国王と言ったか、知らないが、日本も皇帝であれば同格となる。それで天皇と言う呼び方になったのではないか、と思われる節がある。満州建国の前にはすでに天皇という呼称は確立されていた。その後、清国皇帝傳儀が満州皇帝になっている。満州国は日本の属国、同じ様に皇帝では面白くない。衆と異なる呼称が必要である。何時天皇と改称したか、それは日露戦争以後満州事変以前、ということになる。

かくて天皇の御威光は全国津々浦々に及び、海外にもその御威光がとどいていた。「天皇陛下に代わって第〇中隊の指揮は〇〇中尉が取る。」旧軍隊生活の経験ある人なら、こんな中隊長の着任訓話を覚えているだろう。古兵が新兵をいびる時も「天皇陛下に代わって」と来るのだ。その度に頬は腫れる、手足は痛む。惨憺たるその様は筆舌に尽し難い。とにかく良いにつけ、悪いにつけ、天皇をかつぎ出せば何事でも「ハイ」と返答する以外になかったのである。

御ガスはよい香りを放つのだ。日本人全体がこれを利用し、遂に国外に輸出してしまったのである。日本人の端くれであれば、日の丸を振りかざせば、何でも OK という時代が昭和の初頭に来てしまったのである。

台湾現地住民の大多数が福建省から移住して来ている。省都廈門市とは同文同語の間柄である。日本の官憲は意識的に台湾にいる浮浪者ヤクザを廈門市に送り出した。お蔭様で台湾の治安は良好になったが、廈門は台湾全島の悪人を一堂に引き受けたみたいになってしまった。日本語もろくに話せない、これら模擬日本人は大使館保護の下で日本人風を吹かせ、日の丸の下で悪事のやり放題であった。賭博、阿片、売春に関する商売を一手販売したのである。当時は治外法権で、日本大使館の許可がなければ、逮捕はおろか、日本人住宅には中国警察の手はとどかなかったのである。台湾のヤクザと廈門のヤクザが何かいさかいを起こして、白昼、衆人監視の中で廈門のヤクザが台湾人の経営する阿片館に引きずり込まれた。以後廈門（アモイ）のヤクザはこの世から蒸発し、屍体すら見当たらない。ヤクザ同志の喧嘩は勿論であるが、廈門の警察でさえ台湾ヤクザの前では無力であったのである。天皇の御稜威は廈門の阿片窟まで行きとどろき、日の丸の進む所、なびかざる所は無かったのであった。廈門に放逐された台湾ヤクザが台湾人を代表し、日本人と騙る事は迷惑千万である。ちょうど日本赤軍が日本人全体であると誤解されては迷惑であると同様に。

これらの悪事は天皇の御稜威を悪用したのであって、天皇の意志と全然関係のないことは明白である。日の丸自体悪事が出来る筈がない。戦後の一時期に日の丸を、髑髏（ドクロ）を描いた海賊旗と同一視され、見るも痛ましい時代もあった。悪事を働いたのは人であり、日の丸ではない。天皇又然り。日本人はこの事を銘記すべきである。

戦前、天皇は憲法で規定されている様に「神聖にして犯すべからず」であった。天皇は現人神であり、神様であるから犯す事も出来ないし、犯す術もないのである。我々は神様にお祈りしても、神様が聞き取ってくれたか否か知る事は出来ない。神様もこんなにしなさいとは言葉では言ってくれない。戦前の天皇は神様並みで、口出しをしないのが原則であった。国運を左右するような御前会議でも天皇は発言をしないのが原則であることを御存じだろうか。

内大臣が天皇の意を体し、色々と質問する。答えを聞いて内大臣が又天皇の意を体し、「この件はこの様に決定します」と結ぶ。これが御前会議であるのだ。それでは天皇の代わりに仏像を前にして御前会議を開いても大差ない。天皇は神様というべきか。聾啞者と言うべきか。それは貴方の自由である。天皇は飯も食べればトイレにも行く仏像、と表現したら不敬であろうか。

戦前、日本の開国は天照大神に始まっている、と教えられた。歴史の時間に、

天照大神には孫もいれば、弟もいる。しかし旦那に相当する男性を発見できないが...と質問した。先生は、それは神話ですから、と逃げてしまった。不敬であるからと逃げたのかもしれない。子供騙しも甚だしい。あの未開化時代は女権時代、雑婚であつ神話の中で、男なしに子を生んだ女性はいくらでもある。ちょうど、鶏の母親である雌鳥は知る事が出来ても、父親である雄鶏は知りようもないのが正常である。雛鳥を私生児と卑下する事はない。それが正常であつたからだ。天孫降臨族、即ち現代の皇室の祖先は遠く南洋から上陸して土着した。これは言語とか建物の形式でもうなずける。故に彼らには苗字がない。これも南方民族の習慣である。例えば吉田一郎の子は一郎次郎、次郎が名で、一郎が苗字となる。その孫は次郎三郎、孫の子は三郎四郎となり、誰々の子である誰々といって、名前はあつても苗字はない。日本天皇に苗字がないのは、その流れをくむ証拠である。開国の祖、神武天皇は多分、その当時の首長か、呪い師であつたと思う。或いは首長兼呪師であつたのかもしれない。祭政一致が国制で、ずっと神祇を司り、百二十四代今上天皇まで連綿と継承されている。その間、天皇親政は殆ど無かつたと言って良い。平安期では関白が万機を切りもりした。源平合戦以降は政權が征夷大將軍の手に移り、更に幕府の將軍が政權を握る事になる。その間、天皇の果たした役目は、英国女王の戴冠式に法王の認可が必要であるのと略々同工異曲のものであつた。明が「日本国王に封ずる」と国書を送ってきたが、それは足利幕府の將軍であつて義満に対してであつた。現代式に言うならば、国際連合によって承認された日本の元首は將軍足利義満であつて天皇ではなかつた事を意味している。その間天皇は一貫して神祇を司り、神道の中心であり、神官の代表でもある。徳川末期になり、世の中が騒がしくなり、明治維新という革命運動になつてしまつた。例えてみれば、地方選挙で派閥闘争が激しく、財力、金力、又は暴力沙汰になるから、ではお人好しで人格者のお寺さんを県知事にしようではないか、と話でまとまり、坊主が県知事なつた様なものである。革命の後は古今東西を問わず、権力者が権力の座から引きずりおろされ、命まで危険になるのが普通である。中国歴代王朝、西欧の各王朝、皆それである。第一次大戦後のドイツ皇帝カイゼル、ロシア天皇、エチオピア皇帝等が近代史に出て来る。源平合戦の時は平家滅亡の側杖を食つて安徳天皇まで壇の浦で海底に沈んでしまつた。北条氏、織田氏、豊臣氏、皆その例外でない。明治維新で徳川氏が滅亡しなかつたのは実に皆神官天皇の徳の致す所であると言えなくもない。

私は天皇を盆栽に例えた。盆栽は床の間でなくても、家の中の然るべき所において、継続して丹精し続ける必要がある。毒にも薬にもならないかも知れないが、少なくとも情操の陶冶に役立つ。その家の格式も上る事になるし、その家の主人の社会的地位も向上する。ほしくなつた時に急いで作つたら渋みのある盆栽は簡単には出来ない。まして格式高い盆栽であれば尚更の事である。

私は又天皇を仏像と表現した。仏像は仏壇に上げて礼拝するものである。押入れや箆笥にしまい込んだら罰が当る事を知るべきである。



戦争の恐ろしさ

戦後、日本の多くの都市が焼け野原となってしまった。食べる為に、生きる為に日本人の舐めた辛酸は筆舌に尽くし難い。それを知って日本人は戦争の恐ろしさを体得していないと言う私は余程残酷な冷血動物であると思われるかも知れない。よく言われている様に、戦争は大変残酷です、もうこりごりです、と言う言い方に私は歯痒さを感じる。だからと言って、もっと適当な表現方法があるかと言うと、色々考えたが見当たらないので、尚更もどかしいのである。

大きくて、大きくて、表現の出来ない数を無限大と言っている。数の最大級である。この数にも更に階級がある。例えば、立方体の豆腐を縦の方向に際限なく切り続けるならば、一枚一枚の薄揚状になる。紙の厚さより薄く、表現の出来ない薄い板状になる。この板状豆腐の総数が無限大であり、一枚の豆腐は無限小である。更に横の方向にこの豆腐を同様に際限なく切り続けると、ラーメンのような線状豆腐になる。この一本一本の線状豆腐の総数もやはり無限大であり、各一本の線状豆腐はやはり無限小である。先程の無限大と今の無限大には相異がある事はすぐ頷ける。しかし、第一段階の無限大と第二段階の無限大にはどれ位の差があるか。それは数で表現出来ない。即ち無限大と無限大の和も、差も、無限大である。しかし第二段階の無限大の上に更に第三段階の無限大がある。この線状豆腐の束を高さの方向に際限なく切り続けたら、点状の豆腐になり、その点の総和は第三段階の無限大である。一粒一粒の粒子は無限小になる。これは頭の中で考えるだけで実物は見せられない。分子より小さく、原子より細く、頭の中で想像するだけである。

戦争に於ける恐怖感に対する症状を、仮りに数で示せば、恐怖百で参ってしまう。いくら気が強くても、恐怖二百、或いは三百と言う有限の数で崩壊期に到達する。恐怖無限大になる前に大体全部死に絶えるのである。まして第一段階無限大の恐怖を通り過ぎ、尚生存して第二段階の恐怖にめぐり合う事はまず不可能である。若し第二、第三段階の無限大恐怖も通過出来て、尚生きている事が出来たら、それは神様と同格だと言っても良い。原子爆弾の爆心地にいて、尚生還出来た様なものである。

無限大恐怖を目撃した人で生存者はいるにはいるが、本人はそれを話した

がらない。或いは話せないのもあろう。広島には原爆を投下した飛行士が精神的恐怖に耐えかね、発狂したと聞いている。発狂したその飛行士は災害現状を見たわけではない。報道関係でその悲惨な様子を知っただけであった。戦争には恐怖と言う薄気味の悪い悪魔が、恐怖度一、恐怖度二、三、四、…無限大、更に無限大第一段階、第二段階、と準備して待っているのだ。薄気味悪い、意地悪なうす笑いの目をむいて。

原子爆弾は実に残酷であった。一瞬の中に二十万の人命が失われた。二十万、と一口に言うが、一ヶ師団の兵力は略々二万人、だから十ヶ師団の全滅を意味している。戦前、日本の常備兵力、十七ヶ師団と比較すればその数の多いことに驚く。こんな事を言ったら死者に対して厳しいかも知れないが、彼等死者は無限大の恐怖を味わっていない。何故ならアッという間に命は露と消え、体は煙となり果てた。恐怖感と感じる間もなく、苦痛を訴える時間もない。それは安楽死とも言える。爆心地を離れた所では、生存者が大変な恐怖を受けたと思うが、大部分が後幾日して命の終点に到達した。その後かたづけをした人の恐怖が死人よりも大きかった、と思う。

無限大の恐怖について、私は次の如く定義したいと思う。 恐ろしさを感じる時間が合って、それを意識している事。 この恐ろしさから離脱する方法もなければ、手段もないことを自覚させられる。 何かの調子にその恐ろしさから脱出出来て、自分の体験を回顧、発表する能力を持っている。気狂いになっては話にならないのだ。こんな人は世の中に生存する可能性が皆無、と言っても過言ではない。しかし、それを見ただけ、聞いただけでも、その恐ろしさを知ることは出来る。又聞きにしてもその効果は相当大きい。百人が百人、日本人は原子爆弾は恐ろしい、非人道だ、と絶叫する。それは日本人の一人一人が原子爆弾を体験したわけではない。又聞きにしても、またその又聞きであっても、その恐ろしさの一端を知ることが出来るのである。

中国戦線で或る日、逃亡した捕虜が再度捕虜になった。この愚か者死刑だ、と言うわけで営庭に引き出された。日本刀ためし切りが出来る、というので処刑執行を志願する者がワンサワンサと出て来た。この捕虜は顔面蒼白、自分の運命に対して悟りを開いたのかも知れぬ。何か口でモガモガ言っていたが、何が何だか理解できない。ところが処刑執行を志願した人は一人去り、二人逃げて、最後に残った人も足もとがガタガタ、「元気出せ」「切れ」と言われて打ち落とした刀は首に当たったが切れなかった。刀が首の骨に咬み付いたまま動脈が切れていないから、すぐには死ねない。刀を首につけたまま営庭の中を東から西へ、右から左へ、わめきながら逃げ廻った。時間にしてどれくらい経過したか知らないが、形相の凄まじい事、凄惨な様子は表現のしようもない。血はタラタラ、呻く、叫び走る。最後は鉄砲で撃ち殺したそうだと目撃者はその日、飯も喉を通らず、その後日、眠っている間でもよくうなされた

言う。この人達は無限大の恐怖を参観した事になる。後日になってもこんなおぞましい話、いやな思い出は思っただけでいやである。それで口は自ら堅い。

731 部隊に送られたマルタを想像して見よう。反日分子と言う有り難くもない名前をつけられて拷問される。一口に拷問と言っても、その期間は長く、受ける肉体的苦痛は表現のしようもない。タライまわしに回されてとうとうハルビン駅まで来た。夜中又何処とも知らない所へ連行される。嗚呼、今度こそは殺される、拷問死だ、今更ながら自分が不注意に漏らした反日言動を後悔するであろうが、もうそんな気力も体力もない。ところがおかしい。ここに来て監視は厳重だが、食事もよくなるし、拷問はおろか、叱られる事も、殴られる事もない。何が何だかさっぱり分からないがうす気味悪い。マルタになったらいい。マルタとは何であろう。殺されることに間違いはなかろうが、それだったら少し楽な死に方であってほしいと願っている。ところをご馳走はたっぷり、体力が大分ついてきた頃、やれやれ、万一神様の加護があって釈放される事があれば、と空頼みしだした。外の塀は非常に高いから逃げる事は出来ない。真夜中、急に呼び起こされた。神様助けて下さい、白状すべきことはもう皆かくし立てしていないから拷問はもう御免願いたいと思いながら廊下をのそのそと歩いて行く。ちょっと止まれと声がした。殴られるかなと思っていると、手を出せと言われる。何の事か知らないけれども手を窓外に突き出すと固定されてしまった。寒い寒い。その中に寒くて手がヒリヒリと痛み出す。助けてくれ、この位で許してくれと泣き騒いでも、誰も相手にしてくれない。そのうち手の痛さも忘れて頭がぼっとしている時、棒か何かで手を叩かれた。まだですね、もうしばらく。と言う声が聞こえた。何の意味か良く理解できない。又しばらくして、カチカチと言う音がした。自分の手であるみたいだが良く分からない。完全凍傷です、「良し」と言われて外された手錠から自分の手を見れば、木の枝みたいに硬くなっている。連れて行かれた部屋は温かい。いきなり温水の中に手をつけられた。皮は脱げ、肉が落ちる。これから治療だ。ヨーチン、赤チン色とりどりの何か正体の知らない薬をぬらされて、マルタ小屋に返される。マルタ同志、慰め合うにしても言葉が出ない。今日の出来事は何を意味するか、事情が多少理解出来て、自分の運命を嘆いても、どうにもならない事を悟る。早く死にたい。薬に死ねたら後は何も望む所がない、と達観して来るのであるが、それすら出来ない。かくして両手の実験が終わると今度は両脚。惨憺たる自分の姿を見ると自分ながらおぞましい。この頃になると自殺の能力すらなくなっている。こんな事は一時間や二時間で完了出来る筈がない。一ヶ月、二ヶ月、或いはそれ以上継続されて行く。凍傷実験の材料として不適格になった頃、頭の中で何を考えるだろうか。残酷な人体実験をした 731 部隊も心理実験は忘れたらしい。凍傷実験の後に残されたマルタの惨憺たる様はもはや人間の形を保っていない廃品であったと思う。最後はガス実験、恐らくガス室に連れて行ったとき、頭の中は空白。名実ともに生ける屍であったと思う。特攻隊が敵艦に突入するとき「お母さん」と叫ぶそうだ。マルタがガス室に入れられるとき

「お母さん」と叫ぶ気力すら無かったかも知れない。或いはやれやれこれで死ぬことが出来る、と喜んだかも知れない。知る人はいない。何れにせよ、マルタの嘗めた恐怖は無限大の恐怖であろう。但し皆が皆、無限大第三段階の恐怖まで体力を保つ事が出来たか？ それは731の生き残り組みに聞くより道はない。彼らは想像だけで割合上手に書きましたね。でも事実はそんな生やさしいものではないよ、と答えるかも知れない。

一般庶民が無限大恐怖に遭遇する機会は何もない。所が或る日、急に戦場になった。例えて見れば、何千何万と言うアリが住んでいる巣を見つけたいたずら小僧に火をつけられた様なものである。今迄女王アリを中心に社会生活を営み、働きアリは勤勉そのもので、せっせと食料を運搬していたアリの楽園は大混乱となり、何事が起こったかすら理解できない。人間の目から見れば、ただ単なるいたずら小僧の子供であっても、アリにはなす術がない。生まれて始めて見る火は、アリにとって、人類が初めて原子爆弾に遭ったようなものである。すぐに火が消えたならともかく、継続して燃焼したなら、アリはただ右往左往して、どうしたどうしたとうろついているだけである。人間の目から見ると全く気が狂った恰好である。その中で女王アリも焼け死に、このアリの巣は滅亡してしまう。

沖縄戦を神様の大きい目から見れば、県民一人ひとりがアリであって、牛島中將も戦いアリの一匹に過ぎない。いたずら小僧の目から見れば、こんな事はどうせ全滅に決まっている。アリよ、何を右往左往してあがいているのか、と冷やかに笑っている。恐怖の坩堝（るつぼ）の中にいるアリどもに、自らを守る能力もなければ方法もない。それでも火の渦から逃げ出した少数のアリに、砂糖水の一滴をたらししてくれた。宣撫工作とはこんなもので、感謝することはない。砂糖水は、火を放ったいたずら小僧の仏心からではなく、その気まぐれに過ぎない。全国がみな沖縄戦のように最後の決戦をすれば、無限大の恐怖とは何か、目にしみて来るだろう。

最後の決戦場となった沖縄では、涙ぐましい話しが山ほどある。しかしその多くは生き残り組によって美談化されているのが多い。姫ゆりの塔、聞くからにいじらしくも可愛い名前である。現地の人の話では、火炎放射器で更に毒ガスをおまけされたらしい。可愛らしい乙女だから、その死相は眠るが如く安らかな顔をしていたと想像する人がいたらどうかしている。校長のほかは何人か男の先生もいたが、杖と頼む先生も救いの手を伸ばしてはくれなかった。最後の混乱は、想像しただけでも身の毛がよだつ。中にいるのは女ばかりだ、と叫ぶ知恵もなければ、もう最後だから大和撫子らしく清らかに死にましよう、と言って「海行かば」とか「乙女の祈り」でも歌いましょうと言うゆとりもなかった。その何れかをやれば、死なずにすんだかもしれぬ。思えば思うほど不憫な乙女達、と悔し涙を流しても、それはただ単なる馬鹿の後知恵と言うもの。

また、壕の中に隠れている非戦闘員を追い出して、兵隊が自身で壕の中に隠れ、戦争

の邪魔になる、敵に発見されると困るから早くその場を立ち去れ、と追い出されたのもいる。離島では、持久戦の為だ、口減しをする、と言って多くの老弱及び女性が殺された。一億玉砕だ、と言って婦女老人まで崖の下へ突き落とされた。海の中へ放り出されたのである。県民で戦場をさまよって来た人は、兵隊に対してあまり好感を持たない。

戦場における軍民相克は別に珍しいことではない。むしろ当然のことだ、と割り切るべきかもしれない。日本兵だけが非常に悪いわけではないのだ。沖縄ではその苦痛を一人で味わわされたにすぎない。現在聖域として色々な記念塔が建っているが、終戦後、外地から帰還してきた人を含めて、沖縄南部の人口は三分の一になっていた。帰らぬ三分の二の一人ひとは、無限大の恐怖を抱いて帰らぬ人となったのである。敵も味方も皆、殺し屋に成り果てた、戦場の中をさ迷った県民こそ哀れであった。

では、生き残り組、幸運に恵まれて助かった人々はどうかであったか。北部に逃げた人に幸運組は比較的多かった。また、彼らの受けた恐怖も南部に比較して少なかった。方向もわからず、山手に逃げたつもりで右往左往している。いつピカドンと来るのか知らない。ナバーム弾が天から降ってきたら、豚の丸焼けのようになってしまう。いずれにしても逃げ場がなく、「これで一巻の終わりか」、とポーッとした頭の中で閃く。ヒューッという流れ弾の音がした。弾丸は高いから危険はないけれども、初心者はこれだけで腰が抜けてしまう。ポトツという音がしてすぐ隣にいた人が悲鳴をあげた。助けなければ、と思うが恐ろしくてその場から逃げ出すのが精一杯である。救護訓練で習った方法で助けてくれ、とせがまんばかりの恨めしそうな負傷者の眼つきが気にかかる。動物的な反射神経で、急鼠猫を咬むという事もあるが、その弾がどこから来たかすら見当もつかない。即ち咬むべき猫の姿も見えないのである。喉は渇く、腹は減る、食べられるもの、飲めるものもない。かくして一日は暮れようとし、気分も落ち着いてきた。とは言うより、どうにでもなれ！という気持ちになったのかもしれない。ふと気がついてみると、その母の手はしっかり握っていたが、わが子も弟も行方不明、いつどこではぐれたのか思い出せない。頭がポーツとして一層のこと死んだらとも思うが、戦場の夫、行方不明の子を思うと、おいそれと死ぬわけにもいかない。敵から逃れなければと思うだけで頭が一杯。何が何でも走れ、すると、いきなり米兵の前に出てしまった。キャンプに連行されて何をされてどうなるのかとヒヤヒヤ、心は千々に乱れるが、付いて行ったら、そこには食べ物がたくさん。ああ、よかった、は好运、敵兵の前で妙な動作があったのでズドンと一発、これは幸運を前にした不運。ところが、三分の二の人々はその幸運の前にすら出られなかったのである。最後の情況さえ不明のままであった。

満州から引き上げた女性の大多数は、丸坊主の男装であった。目の前で弟がソ連戦車の下敷きになり、煎餅の様になってしまった。どうする事も出来ないで、頭はポーツとなるが、転倒する間もなかった。

戦場における軍民相克は極めて普通のことであって、ソ連兵もアメリカ兵にしても同じである。日本兵もまた同じである。ただ外国で悪い事をすれば、「日本兵がやった」、と来るだけで、日本の兵隊が中国大陸や沖縄でやった非人道史が明るみに出るのは多くない。戦場とは道義なきところ、情も涙もないところである。女、子供だからと言っても容赦はない。しかし、後日人々はこれを美談化する。その方が耳ざわりがいいのだ。いみじくもつけたり、その名はひめゆりの塔。

遺族の嘆きを避けるため、耳ざわりを少しでも良くする意味で、批判の的をかの有名な白虎隊にしよう。白虎隊は生きても死んでも明治維新の大業には関係のない無限小的存在である。あたら来るべき新時代に有用である人材を無意義に消耗したと批判したら非情であろうか。美談化された白虎隊は、小説でも映画でも、刺し違えて死ぬところで幕切れとなっている。死に切れずにもがいているところ、死体の後片付けをしている場面が最後の一幕であったとすれば、お伽にも、芝居にもならない。八月十五日の玉音放送を聞いて、宮城前で切腹自殺を計った者もいたようだが、白虎隊にも及ばない誤った忠誠心である。日本再建の役にも立たず、美談だとは言えない。戦後、日本の良い人たちは皆死に絶えたと良く冗談を言うが、冗談はあくまで冗談であって、現在生きている人は皆悪人であるとの同義語ではない。

私が何と言おうが、自殺した人も、白虎隊も何とも言うことが出来ない。死人に口なし、だからである。沖縄で不運のくじを引いた人も死んでしまったから、同じように死人に口なし、転じて幸運のくじを引いた生還者が当時の出来事を美化し、美談を創作するのである。それゆえ無限大恐怖の実体は、なかなか表面には出てこないのである。

終戦になって、やれやれ平和の時代が来たと思った頃、初めての恐怖を日本の一部で味わわされた。しかし、その恐怖の深さは到底戦場の足元にも及ばない。戦場を百とすれば、この恐怖度は十にも及ばないのである。米国三十三師団が神戸に上陸した頃を覚えている人も多かろう。戦争には強いが軍紀芳しからぬ、これ等一万七千人の黒人兵、眼中に人はなかった。その上、第三国人がのさばり出し、愚連隊・予科練崩れという新しい人種まで誕生し、治安は乱れに乱れ、一時は無政府状態となり、警察は無力化していた。治外法権の状態となり、一ヶ月の間に殺人・強盗・強姦は千件を超え、神戸はヤクザの保護に頼らなければならない有様であった。国乱れてヤクザの株が上がったのである。近頃色々批判されている山口組の発生地は神戸であり、神戸は山口組の復興の地でもある。感謝された時代もあったのである。この位の不幸に遭遇して恐怖度十ならば、恐怖度百、二百……、無限大の恐怖とはどんなものか、想像すら困難な位である。

日本人は戦場・戦後の恐怖を戦争に負けたからだと思いがちである。しかし

それは完全な誤解である。戦場には軍と軍の戦いがあり、軍と民の争いがあり、民と民の争いがある。皆生き残るためであるから、その相剋度は命をかけての凄惨さで、場所と時間の如何によらずに継続される。戦場になったら勝ちもなければ負けもない。老人でも子供でも差別はない。戦闘員と非戦闘員の分別もない。ただ弱肉強食がそこに展開される。戦場になれば敵も味方も全部が殺し屋になってしまう。外国人、即ち敵のためにひどい目に遭ったと思うのは間違いで、敵の兵隊にやられた、味方の兵隊にもやられた、民間の強いグループにもやられた、民間人の強い野郎にもやられた、で最後は行方不明、何が何だか解らないで殺されたと言うのが多い。恐ろしい、怖いでもたついている間に死んでいくのが多い。人を殺した人も後で自分が殺されることもあるし、生き残っても自分の経験談は余り口にしない。自分の罪状を秘匿するため、自己を美化するために。

戦争中、軍部は本土決戦を計画していた。もしその計画が本気であるとするならば、これは実に馬鹿げた話である。敵兵が日本本土に上陸し、決戦場を本土に移していたなら、日本国は滅亡の運命にあったかもしれない。軍部は白虎隊の隊士に相当するから、死ねばいい、と気楽なものであろう。しかし、死ねばよいと思っても皆死ぬとは限らない。一億玉砕と言っても、一億全部死に絶えるはずがない。アッツ島で玉砕した部隊でも生きた英霊として多くが帰国したではないか。ハワイを攻撃して軍神と祭られた特殊潜航艇の十人でも、生き残りが一人いて、捕虜第一号になっている。それゆえ九軍神となったのである。当時、私たちは五隻の潜航艇に九人、どんな乗り方であるかと疑問だった。本土決戦が現実となれば、日本全国の民衆は皆白虎隊の遺族よりも惨めなことになっていたと思う。それでも「負けました」と白旗を揚げるには当時の軍部の大和魂が許さなかった。思えば身の毛のよだつものがある。この恐ろしさは、後で回顧すれば尚更恐ろしくなってくるものである。

厭戦気分濃厚、食糧事情劣悪、戦う武器もない状況下で、頃合よろしく原子爆弾が降ってきたのである。一種の覚醒剤であるとともに日本を救った神風であった。この爆風が日本を救ったのである。犠牲者は日本の捨石で、日本再建の礎となったのである。以って瞑目すべきである。原子爆弾が一ヶ月早くても、又は一ヶ月後れても、戦局の終結は、現在とは趣がたいぶ変わってくると思う。

戦前、日本は自ら神国を自認し、国難があれば、元寇のように神風が吹くと信じさせられた。昭和の神風は少し後れて、心ならずも、原子爆弾の爆風となって広島で吹いた。長崎の二発目で、日本は白旗を揚げる口実が出来て、ついに無条件降伏。耐え難きを耐え、忍び難きを忍びと諭されて、頑迷な軍部もこの決定は賞賛されるべきであり、口聞かぬ天皇も、この事だけは英断であったと言える。

仮に抗戦が続けられたら、日本は朝鮮半島の様に分割占領をされていたであろう。無限大恐怖に近いものが全国に拡がったであろう。全国至る所でひめゆりの塔、健児の塔がお稲荷さんと肩を並べて建つことになろう。深く考えることもない。朝鮮半島では、今でも一千万の人が自分の親兄弟を探し回っている。妻子の安否を尋ね、消息のない者はその生死すらわからない。消息があっても顔合わせが出来ない。生き別れは死に別れよりつらいものがある。彼らは三十八度線を境界に幽明を異にしているとも言える。同情の涙の一滴ぐらいはあってもよい筈。今頃北方四島の事でわいわい騒いでいるが、少し遅い。北方四島がどこの国になろうと、島が沈む事はない。それよりも樺太・千島から帰国できず、望郷の涙にむせぶ同胞を、君らが救済してはどうか。

神風は更に吹き続けて、朝鮮動乱となり、ベトナム戦争となった。お蔭様で、日本は神武景気をつくり、早く復興が出来て経済大国にまでなり上がった。朝鮮半島とベトナム戦争が、日本の不幸を肩代わりしたようなものである。日本はこの幸せを大事にし、神のお恵みを大切にしなければならない。そして自らを無限大恐怖の渦から免れると同時に、進んで他人が無限大恐怖の波に呑み込まれないよう、協力する心のゆとりがあってほしい。神の御心を踏みにじるなかれ。前車の轍を踏むなかれ。これは神の御慈悲によって得た幸せであるから。

第三章 日本を思う

明治維新の底力は何処から出てきたか？

ペルーの黒船が日本へ来た時から日本の世情が騒がしくなり、またたく間に明治維新の大業は成功した。元来日本は自分の区別が厳しい国であった。征夷大將軍であった日本政権主体は、源氏か、平氏の出身でなければいけなかった。剣術が優秀であるからと言って、侍になる事は出来ない国である。

一万石で大名だから、一千石、二千石は家老格。現在の日本人の収入を米の値段に換算して見ると、殿様である大名に相当する人は、浜の砂より多くなっている。サラリーマンの収入でも殆んどが家老格以上である。しかし、昔の皇室の疲弊口は、孝明天皇に粥を献上した人が明治になってから、正一位を与えられ、勲一等を追勲される程の功勞になった。子供の頃、大東宮であった明治天皇も、良く路上で砂いじりをしている只一人の子供に過ぎなかった。そして天皇家の血統は、消えるかに見えたが、維新の大業は成立したのである。

そこで、殿様は華族になり、侍は士族、と戸籍上に記載された。士族とは只単なる空手形であって、金に替えて飯として食べる事が出来ない。士農工商の中、士以外にも皆苗字を許され、青井、赤井等、色々と珍苗字が出て来たが、日本の民衆はそれで満足し、皆平等となり、偉くなったと感激したのである。新日本の原動力は起り、挙国一致、新政府擁護の実は津々浦々に行き渡ったのである。今迄威張りちらして来た侍に対する対抗意識もあったと思う。

成金帝国、日本の誕生

侍は元来、生活能力に欠けた一小集団である。主家に忠義を尽す、と言う事は、とりもなおさず自分の為に、でもある。万一、主家を取り潰しになったら、自分は浪人になり、その日から食べられなくなる。主家を大事にしない筈はない。その殿様が一時に消え失せ、侍は士族にはなったが、これではパンにも飯にもなれない。その中、日清戦争が始まり、侍は新たに職業が出来て兵隊になった。将校なら尚更良いが、下士官でも長剣を挿して、士族に再生したのである。農民を主体とした平民は、兵隊に行けば、尺余の牛蒡剣をさげても士族に出世したとばかり思い込み、命を国に捧げたのである。その上、士族と平民の競争意識もあって、闘争意識は強かったのである。

それに比し、清国は旗人（満州人）と称する階級がいて、その他の民族は武官にはなれなかった。その上、漢民族を主体にした中国人は文弱で、昔から「良い鉄は釘にせず、良い人は兵にならず」と言う思想があって、日本と清国とでは戦闘意識が異なり、清国側にはやる気がなかった。この様にして、大清帝国は世界からは眠れる獅子と認められ、又日本からは清国奴（チャンコロ）と蔑まれるようになった。

清国から支払われた賠償金は新日本建設にどれ位役立ったか、計り知れない。その上、今まで帰属不明瞭であった、琉球列島が日本の領土と確認され、台湾は日本に帰属した。清国にとっては、欲しいならタダであげよう、と煙草の一本位ではあったが、日本にとっては莫大な財産であったのだ。

続いて日英同盟が締結された。それで初めて日本という国の存在が知れ渡った。日英同盟は日本にとって、美智子妃殿下の輿入れ、ダイアナ妃殿下の結婚に匹敵する位の出来事であって、日本はシンデレラ姫の遭遇だったのである。かくして日本は日の沈まぬ大英帝国と平等にお付き合い出来るようになり、大日本帝国は強国として、誕生の準備が完成されたのである。

続いた日露戦争で、日本は又勝利した。それによって得た、樺太南半分は日本にとって領土拡大にはなったが、実益から見ればそう多くはなかった。それでも漁業権の獲得は大したものだったが、二次大戦前頃には忘れかけられた。鯨一頭は七村を潤おす、と言うが、それが鯨の十頭や二十頭だけではなかった。その昔、塩鮭は

貧乏人の食料であったが、それでも食べ切れず、鮭が肥料にされたものである。
そして、日本人自身は余り気が付いていないが、侍の成りの果ては一掃され、
悩みの種になるべき浪人問題も誕生せず、全体が生産的、経済的に安定した。
浪人となって世を騒がせる、不満分子であるはずの侍は、日清、日露の戦争で、
死ぬものは死に、生き残り組は就職出来て、社会は安定し、自由民主帝国制国家の
形成は成就するかに見えた。

自由民主。日本は夭折した

かくして文明開化を謳歌した日本の到来となり、自由主義・無産主義・無政府主義・天皇機関説等、言論自由の声は当然の事ながら芽生え、民権が伸張されたのである。愛します、すきです、等の流行歌も流れ、識者の眉をひそめさせた。

如何に美化されようと、すきです・愛します、と言った意味は、終局的には「私は貴女の子宮の中に私の精子を注入したいです」と言ったら余りにも下品でしょうか。例えばスエーデンの様に国王と国民の間に血縁関係がないので、これを奨励し、国民の心持ちをセックスに向けさせたら、革命思想も起きず、温和になり、皇室は安泰、政治的にも安定出来るが、長く、「子曰」で暮して来た日本人には肌が合わないのである。

月が鏡であったなら、夜毎映して見ようもの、こんな気持ちでいる私、ね！忘れちゃいやよ、忘れないでね。位の所でストップがかけられた。そして、「君死に給う勿れ、我等の親は人を殺せと教えしや... すめらぎの命は戦の庭に立ちて人を殺せと教えしや...。」と長々と続いた詩は人々の心を打つ名作で、第一次世界大戦の頃であったと思う。与謝野晶子が出征している弟に上げる詩として発表されている。今は全文を忘れ、調査する資料もないのが残念であるが、自由日本はこれでようやく終焉に近づき、やがて、

「碧羅の淵に波騒ぎ、五山の雲は乱れ飛ぶ、混濁の世に我立てば、義憤に燃えて血潮湧く。権門上に傲れども、国を思う誠なし、財閥富を誇れども、社稷を思う心なし。」と、悲憤慷慨、旧制高校生には大変人気があって、日本の思想傾向は転向し、二二六事件、五一五事件が勃発し、遂に満州事変となり、日本はそれで亡国の禍根を播いてしまった。

国としては軍国調豊かになったが、人民は平和に慣れ、あまり好戦的ではなかった。満州事変の頃、流行した歌、「ここはお国を何百里、離れて遠き満州の、赤い夕日に照らされて、友は野末の石の下。」でも理解できる様に、国民は好戦的でなく、むしろ厭戦気分が濃厚であった。その時代に流行した歌は良く庶民の気持ちを代表する。しかし、時の流れは人民から自由と民主を奪い取り、やがて軍国主義的大日本帝国となってしまう。

その原因は色々あるが、日本人が気付いていない点として教育過剰がある。

明治時代の学士様と言えば高級インテリで、良い職業が求められ、高級幹部になれる約束がつけられていた。それゆえ、大学に進学する事は仕官の道に通じたので、猫も杓子も大学へ、と青年は走る、大学にしても商業化した私立大学が発展しすぎてしまった。さて、苦心して大学を卒業し、学士様にはなったが、就職が難しい。給仕でも小僧でもやれば良いが、面子がそれを許さない。

それで、遊民になった彼等は大陸浪人となり、侵略の基礎が形成された。日本人の多くはいい気持ちでもなかったが、いかにもなし難いのである。先に上げた、ここはお国を離れて何百里、は軍歌でありながら、「時計ばかりがコチコチと動いているのも情けなや」と歌っているあたりは哀調を帯びている。

L/Cの見積もりを誤った日本

戦争の準備は着々と進み、張作霖の暗殺は成功し、柳條溝事件で日本は満州に進攻し、遂に清国の廃帝を立て、満州国の成立を見た。しかし、世界各国はこれを認めず、実地調査で、日本が侵略したと判決され、日本は国際連盟を脱退する。それ以前に日英同盟が廃止されている。しかし、国際連盟を脱退した事は、日本にとって、ケチのつき始めである。これを実行したのは松岡洋介であり、彼は近代史に於ける日本の罪人である、と言っても良い。

彼は気取り屋で、身長が低く、しかし、大きい事の好きな人である。三国同盟を締結して日本を窮地に追い込んだのも彼であり、ソ連と不可侵条約を結んで、南樺太をソ連に贈呈したのも彼である。彼がドイツで受けた歓迎は、ヒットラーが西部戦線から凱旋した時と同じ規模であり、ドイツは国を挙げての大歓迎であった。こんなお祭り騒ぎはドイツに於いて、後にも先にも、この二回だけであった。しかし、テーブルに乗せられた御馳走は貧弱であった。その点、ソ連に行った松岡洋介一行は、馳走の豊富さに驚いたと言う。それで日ソ不可侵条約を結び、樺太をソ連に献上した。そして日本に帰国してから、歓迎の不足を不満だ、とした松岡洋介である。彼は最初から最後まで、外交官としては不合格であり、日本人としては憎んで余りあった人物であるとも言える。日本はその時点に於いて、すでに無条件降伏を予約させられた、と言っても過言ではない。

しかし、日本の戦争準備は進行した。中国全土の軍用地図から、兵要地誌まで完成された。そればかりでなく、実地調査も詳細に行われた。支那事変の最中、北支・中支・南支の奥地まで進んで、もし道に迷ったら仁丹の広告を探せ！と言われていた。相当の田舎でも、鬚を生やした仁丹将軍がその要所、要所で待ち受けていた。将校はそれを眺めて、左にクリークがある、右にトーチカがある、この道から進めば良い、と行進の方向を誤ることがなかった。

柳條溝事件から発生した満州事変は満州国の建設に終り、日本の勝利に帰したから、盧溝橋事件も中国平定まで、大した時間がかからない、との見積りは完全に覆えされた。遂に蒋介石が「日本が無条件で撤退すれば、過去は水に流す」と声明を発した時には戦火も広がり過ぎて、取捨困難の状態になっていた。中国の土地は広すぎ、人口は多すぎて、日本の手に負える代物ではなかったので

ある。その中、重慶に対して空襲がかけられたが、重慶としては蚊にさされた牛の角の様に痛くも痒くもなかった。戦後知った事であるが、重慶では各自の家に地下室を作っていたが、杭も棒も、木の枝一本使用せずに、地下室が出来たと言う。仁丹広告で中国全土を調査した日本軍部でも、最後まで知る事が出来なかった重慶の土質である。仁丹広告の意味を中国側が知らなかったと同様に！

日本軍部は大きい誤算があった。当時の中国は厳格に言って統一国家ではなかった。例えば、山西省の間錫山は山西王と言われ、鉄道でも狭軌を使用、それで中国各地で使用されている広軌の汽車は、山西省には入れない有様で、日本の戦国時代に似た様なものである。日本がポコペンの支那兵と言っていたのは、当時の北洋軍閥を指し、指揮系統がまちまちで、軍規と言うものがなかったと言っている。満州事変が起こった時でも、張学良に応援する軍隊がなかった。それで、日本軍は、各軍閥を各個撃破すれば、北支事変でも、支那事変でも、すぐにかたづくと思っていたらしい。しかし、問屋はそんなにおろしてくれなかった。

日本と中国の教育方法には大きい相異がある。日本は子供達に日本の強さしか教えず、話は皆、武勇伝ばかりである。丁度西部のカウボーイのテレビを見る時、日本は打つ方に廻り、打たれる場合もある事を、子供の時から教えていない。

中国は違う。中国が如何にロシアに苛められ、日本に犯されたかを教え、失地回復は我等子孫の責任である、と小さい時からたたき込まれている。日本は武士らしく、捕虜になる位なら死ぬ、と教えられているが、中国は国の為なら如何に屈辱を受けても、我慢強く再起を計れ、と教えられている。張良が股の下を潜って大將軍になった話。馬丁となって臥薪嘗胆して国を再興させた越王勾践と呉王夫差の話は教育に良い材料としている。

群雄割拠している中国が、一緒になって日本に抗戦する筈がない、の算段は完全に水泡と帰した。中国は蒋介石を軍事委員長に任じ、対日抗戦がやっと一致したスローガンになったのである。中国は不思議な国で、蒋介石が満州の大親分であった張学良を、重慶に軟禁した事もある。張の子分であった軍閥共も重慶で暮し、軍事力も持っていれば、満州からちゃんと財産収益も送られて来る。日本人の頭では中々考えられない事である。抗日行動を共にしていながら、日本軍と仲のよかった八路軍もいた。中国軍と日本軍が正面から出合った。打ち合いになると損害が出て来る。逃げるのも危い。とうとう鉢合わせになったが、お互い戦争は止めにして、酒宴をしようと言話が決定し、酒宴になったこともあると言う。私はこれに参加した台湾人通訳と仲が良かったのである。

中国と言う国は掴み所のない刺を持った鯰であった。その中にビルマルートから軍用物資が入るようになり、ゲリラ戦術が開始され、皇軍は東奔西走し、席の温まるひまがない有様となった。この頃になって、蒋介石は再度、無条件撤退したら

許してやる、但し満州からも撤退せよ、と言って来た。

これは日本が受け入れられる条件ではない。国民感情が厭戦気分であっても国のプライドが許さない。日本が今迄施行して来た教育も、これを許してくれない。その上、日本人は、戦争すれば勝つ、勝てば戦利品が手に入る、だから国として豊かになり、個人としても昇級する、と言う先入意識が強い。だから、ここらあたりで中止して、米国がベトナムから引き上げた様に、中国から撤兵すると言う事が出来なかった。その上、関東軍は強力過ぎた。無理して講和すれば、内乱が起る恐れすらある。調停してくれる人もいない。日本は自ら進んで入った泥沼から足を引き上げる事さえ出来なくなってしまった。

蒋介石が掌握していた軍隊は全中国軍隊の四割以下であると想像する。しかし最後まで軍事委員長の名で、中国の戦争指導をやりとげたのである。中国が一つになったのは、日本のお蔭ではあったが、中国が攪乱されて又二つに分れたのも日本の罪であった。中国にとっては、日本は功罪共にある国である。しかしこの功労は日本の好意に依ったものではないから、中国人の目から見たら、罪だけになる。

日本火中の栗を拾う

L/Cの見積りを間違った日本は、面子にかけてもこの商売は、やらざるを得なくなった。事実、日本としては引くに引けない泥沼の中で喘いでいたのである。仏領インドシナに無血進駐した時点に於いて、おそらく米国は、この小人奴（こびとめ）、わなにかかったな！ と微笑んでいたと思う。

大体、米国の内心としては、中国が早期統一しても、日本が早期に中国を制覇しても心良しとしなかった。何れにしても米国の国益と衝突するからである。

ビルマルートを封鎖された重慶は、それで参るかと思ったが、米国は日本への鉄屑輸出を停止した。それで先にアゴを出したのは日本で、中国ではなかった。重慶は三国時代、漢の復興に成功した地であり、自活の方法はあったのである。続いて石油の輸出禁止にあって、日本に取っては、死活の問題となった。

その為、遂に海南島に鉄を求め、インドネシアのパレンバンに石油を求める事になり、北進説が南進に変わり、国策は180度の転換となった。餓狼食を選ばず、火中で栗を拾えば火傷する事は承知の上で、飢餓に耐え切れないで手出しをした栗だと言えよう。他に食べ物がなかったとも言える。

米国はコソ泥を強盗に育て上げてから、泥棒、と騒ぎたて、他人を重罪に陥れた感がある。又、日本側に立って言えば、他人のしかけた美人局にひっかけり、間男、と呼ばれて、あいた口をぽかんとするだけであった、と例えてもよいのではなかろうか。

日本が米英に宣戦を布告する前、日本の危険性を感じた指導者はいなかったのか？ 皆疑問に思っている。反対者はいたが、口を出し切れなかった、という人もいる。私はそれを好意に解釈し、宣戦しなければ、中国・満州から撤兵せねばならぬ、弁償金も貰えない、その上、建国した満州も中国に返上するとなれば、内乱となり、日本最後の日が来るのを恐れたのではないか、と思う。よく、海軍はそれを知っていたが、陸軍は分らず屋で頑固すぎた、と言う人もいる。山本五十六は「一年間は存分にあげてやる」それに続く裏の言葉は「その後日本は負けるが、俺の知った事ではない」と言う心算であったのか？ 彼は一年余りの後戦死した。命を以って諫める気持ちであったのか？ もうそろそろ日本も旗色が悪くなるから、ここら辺で死ねば、せめて山本が生きてくれ

れば、日本海軍は何時までも強く、あんな負け方にならずにすんだ、と追憶してもらいたかったのか？ 只単なる突発事故であったのか？ 色々な方面で考えられる。阿南大將は無条件降伏と決定して、死んで陛下にお詫びした。私はそれを日本軍人の欠点と言えなくもないと思う。死んだら良いのだ、と言う気持は。

事の是非は別として、征韓論で破れた西郷隆盛が西南の役を引き起した位の意気込みで、陸軍が戦争すると言い張るなら、海軍は軍艦を並べて、一艘一艘輸送船を撃沈してやる、と意気まく気力は海軍の中に一人もいなかった。又乃木大將が軍旗を紛失した時、自決をせず、恥を忍んで旅順攻撃で国に報いる、と言う努力と忍耐が、昭和の武將には一人もいなかったのか。第二次大戦最後の戦場となった沖縄戦で、牛島中將は自決し、大本營は全軍玉砕し、組織的戦闘は終了した、と発表している。どこに於いても同じ文章で、司令官の名前だけ変えれば良い様に出来ていた。日本人の、死ねば良い、という考え方はほめられるものではない。

呉国が越国に亡ぼされた後、伍子胥を挙用して復国を計り、遂に成功して越王勾踐を捕虜にした。勾踐は奴隸として馬子となり、呉国を油断させる為、夫差が病氣した時、その糞を嘗め、この香いなら心配なし、と忠誠の程を示し、これなら帰国させても謀反をするまい、と帰国を許した。帰国を許された勾踐は范蠡を挙用し復国に成功、そして呉を亡ぼした。復国を忘れるな、仇を取る事を忘れるな、と薪の上に寝て、毎日の苦い胆汁を嘗めて自戒したという、中国には臥薪嘗胆の話が伝わっている。西施と言う傾国の美人は范蠡の愛人であり、復国の為、范蠡が夫差に献上した女性で名高い。

昭和の時代には勇將、智將が輩出したが、しかし明治の西郷、乃木、の様な名將はいなかったのである。文人には良臣、忠臣は多くあったが、呉越時代に於ける伍子胥とか范蠡の様な策のある謀臣は誕生しなかった。

米国の姿

戦前、一般国民は外国に対する常識が欠けていた。お隣の中国でさえ、おぼろげにその広さを知らされただけで、その本当の姿はほとんど理解出来なかった。

万里の長城で 小便すればよ、
ゴビの砂漠に、虹が湧く。 と歌い、又
月の砂漠を はるばると、旅の駱駝が行きました。
金と銀との鞍において 二つ並んで行きました。
金の鞍にはお姫様 銀の鞍には王子様
二人並んで行きました。

俺も万里の長城まで行って見たい気がする。豪壮な歌であり、駱駝引きになってもいいから、お姫様のお供をして砂漠の旅を試してみたいくなる様なロマンチックな歌である。戦後、私は蒙古に派遣された戦車兵の少尉と話した事があった。彼は、飲料水すら自由に得られず、所々にある草むらが草原だとはね！ 蒙古は人間の住める所ではない。誰が月の砂漠とか、キャラバンの歌を作詞したか知らないが、頭の一つ位殴ってやりたい気がする、と話していた。

お隣の中国に対してさえ、こんな調子であるから、太平洋を隔てた米国を、日本人がよく認識する筈がない。

戦前まで、否、戦争中でさえも、米国人は自動車を下駄と考えている。あんな連中に行軍なんか出来るもんか？ 白人は黒人を奴隷扱いにしているから、日米開戦となれば、白黒対立して内乱が起り、米国は一ころだ。農産物が豊収であれば、海へ投げ入れて値段をつり上げる不屈き千万な国。高層建築が立ち並んでいるニューヨークで、飛行機を飛ばし、爆弾投下したら、さぞ面白かろう、としか考えていなかった。

しかし、紙と木材で出来ている日本家屋が焼夷弾でやられたらどうなるかは教えられなかった。東京空襲では、ガソリンまでかけられて焼野原となった有様で、孫子の兵法にもある、敵を知り、己を知れば百戦危うからず、とは程遠い浅はかな思考だった。

戦後、米国を訪ねて、その広さ、豊かさに驚いて目を見張った人も多かろう。サンフランシスコで金門橋を見た人が、橋の高さは十階建て以上あろう、と嘆じて止まなかった。当然の事ながら、地球の曲率半径まで計算に入れて作った橋である。その上に乗せているロープは下から見ても一抱え以上である。であるから直径一、二メートルはあると思う。明治時代、既に開通されているから、何歳で誰が何時作ったか、こんなに太くて長いロープを作った工場はどこにあり、作り上げた後、どんな方法で現場まで輸送してきたか。そして、現場に到着後はどのような方法で十階立て以上もある高さまで引き上げたか？ 立ち止まって色々と考え見たが、遂に解明出来ず、まるで、エジプトのピラミッドはどんな方法で作られたか、と言う様な謎だったと言う。

日本人は外国の事を知らなさすぎた。外国の事はともかく、日本の植民地であった台湾でさえもよく知っていなかったと言える。大正末期、日本へ留学していた父が、東京の下町で法螺を吹いた。台湾は暑くてね、夏などバケツを庭先に置き忘れてたら溶けてしまう、まあそんなに暑いのですか、と感心していた。しまった、冗談にしてもこの法螺は大きすぎたと思い、溶けると言ってもバケツがドロドロになるのではなく、溶解した部分の錫が溶けてバケツがバラバラになるだけだと訂正したら、それでもね、と感心され、法螺は通じたと言う。時々それを笑い話にしていたが、錫の溶解点を考えてみても有り得る話ではない。人間が先に死ぬ。

現在では進歩しているかと思うが、試みに、東洋で最初に鉄道が出来たのはどこの国でしょう、と聞けば、日本人は東京の地下鉄を想像しながら、日本に決まっているのではないか、と胸を張って答えると思う。明治二ケタの頃、東京・横浜間に始めて鉄道が開通し、明治天皇が行幸している。台湾は清朝の時代に台湾の地方長官であった劉銘傳が、基隆―台北間に鉄道を施設したのが最初であったのだ。東京でもなく、北京でもなかったのは一寸意外であろう。しかも、日本の植民地であった台湾に東洋最初の鉄道が施設されようとは！ 第二次大戦は国民が目隠しされたまま、全世界を相手にして戦いが開始された、と言ってよい。

日本の道

日本は第二次大戦のお蔭で、五大強国から泥棒猫よばわりされる迄になり下った。そして自分は良い子であり、罪は軍閥にあり、として、終戦時は責任を皆軍人に転化した。出征の赤紙を貰った時、親類も友人も皆「おめでとうございます」、と幟を立て、送り出したのではなかったか。「御愁傷さま」では縁起も悪からうが、何がおめでたいんだ。送行会でお酒が飲めるからめでたいのか？ 出征軍人の妻は、送行会の夜、床の中で夫を抱きしめて泣いている。未婚の出征軍人は、「お母さん、僕大丈夫だよ」と母を慰めている。母も妻も、取り乱してはいけないと、涙を隠して心の中で泣いているのだ。或いは物心のつかない子供達だけが、万歳、万歳と喜んでいたかも知れない。それ故、戦争の責任があるならば、軍閥だけを非難せず、国民全体で反省せねばならないと思う。

では、何を反省すれば良いか？ 私は躊躇する事なく、教育であると言う。大体日本の教育は生半可な事を教えている。昔から日本語は中国輸入の漢字から発展し、戦前まで、それを後生大事に抱え、断章取義が多い。そして自我流に浄化して「士は死と見つけたり」と言う様な、葉隠れの道を日本精神であり、大和魂と勘違いさせられた。「士為知己者死」（士は己れを知る者の為に死す）、「君欲臣死、臣不死、不忠」（君主が臣民に対し死ぬ事を欲するならば、臣民たる者は死ななければ不忠である）。皆孔孟の思想から出た言論である。しかし日本人で下の句を知っている人は、何人いたであろうか。

「士為知己者死、女為悦己者容」、これが全体で一句になっている。即ち、士は己れを知る者の為に死す、女は己れを悦ばす者の為に化粧する、である。日本は上の半分を取って「士は死と見つけたり」と教えられた。

「君君臣臣、父父子子」と言う言葉を知っている日本人も少ないと思う。読み方も、意味も、よく理解しないであろう。これは「君主たるものは君主らしく振舞い、臣民たるものは臣民らしくせよ。親たる者は親らしく、子たる者は子らしい行いをせよ」と言う意味で、「君欲臣死」云々とは対称的な言葉であり、接続的は存在である。日本人はその前半しか教えて貰えなかった。

親の恩、師の恩は非常に強調された。そして日本的に君の恩をその上においた。見た事もない天皇に、何の恩が恵まれたのだろうか。古兵が、天皇陛下に代わって、

と言って新兵が殴られた事が御恩であるとすれば、君の恩は糞食えだ。親の恩、師の恩は良いとして、何故、「養不教父子過、教不嚴師之惰」を教えなかったのか？即ち「養って教えざるは父の過ちなり、教えて厳しからざるは師の怠惰なり」。結局親たる者は子を養育するだけではない、よい教育をせねばいけない。教師たるものは自らを謹厳にし、学生には厳格に、厳粛に教えよ、と言う事になる。親の道、師の道を隠して、子供に対してだけは、要求が山程多い、と言うのが戦前の教育であった。泥棒猫と言われる国民が出来たのは、軍閥を叱責する前に、先生と呼ばれる人々が責められるべきであり、かかる先生を育成した文部省も、こんな教育法を放任した親を育てた社会も、これを分担せねばならない。

生半可な知識は生兵法同様、怪我の因となる。例えば、徳川氏が豊臣氏を滅ぼした、大阪夏の陣、冬の陣は、曲学阿世と言う漢学者が開戦理由を作り上げ、徳川家康が、これを謀略として使用した戦闘であった。豊臣が方広寺を建立した。家康は大賛成で、お金をどっさり使わせ、出来上がった時に待ったをかけた。お寺の鐘に書かれた文字が

気に入らぬ、と言う理由である。その文字は「国家安泰、君臣豊楽」である。国家安泰とは家康の名を壟断し、朝夕鐘を衝く度に家康の頭をたたき、呪詛する為だろう。「君臣豊楽」とは豊臣を君として楽しむ、と読む心算だね。とやくざの様に凄んで来た。豊臣秀頼は年幼で、淀君は下克上の田舎女であり、智将、名将の補佐役に欠け、売られた喧嘩だ、と自力を評価せず、この喧嘩を買ってしまった。家康は老獺にもこの喧嘩を二回に分けて勝利を獲得した。第一回目は手頃な処で、大阪城の外堀を埋める条件で和睦した。この謀略が成功すると、外堀を埋めると同時に内堀までも埋めてしまった。豊臣は、この狸親父、契約違反だと食ってかかった。自分の力を考えず、立たされた立場を顧り見る事もなく、第二回戦に入り、豊臣氏の終焉となった。豊臣氏は「君君臣臣」ではなく、君主は君主らしからず、臣民は臣民らしくなかったのである。

日米開戦を回顧して、アタックされた、と米国人の敵愾心を高揚し、止むを得ず応戦した様に作為的にやった処、支那事変で何年も国力の消耗させてから、ビルマルートで重慶を助け、経済封鎖をして日本をいびる等、家康に教えてもらったのかと聞きたい位である。戦国の三英雄を評して、

鳴かざれば殺してしまえ、不如帰　－織田信長
鳴かざれば鳴かして見よう、不如帰　－豊臣秀吉
鳴かざれば鳴く迄待とう、不如帰　－徳川家康

又こんな川柳もある。

織田ついて、豊臣ひねり、徳川食らう天下餅。

徳川氏三百年の基業が成立した後、織田も、豊臣も、草葉の陰で地団太を踏んでいた事だろう。曲学阿世の輩は、何時の時代でもいて、君側の奸となる。しかし上手に

利用出来たら、お国の役に立つ場合もある。第二次大戦を振り返って、くやしいと思わないかね。日本は何時迄も侵略者と言われ、泥棒猫扱いにされるつもりか。ずるい狐は甘い汁をすすって慈善家として人気を集めている。怪しからん熊は大きい口をあけてペロリと飲み込んで口を拭い、御馳走様さえ言わない。可愛想な猫さん...君が嫌いで罵倒しているのではない。君が好きであるから、可愛いから、色々と愚痴もこぼしたくなるのだ。

戦後、色々と改革され、大進歩し、躍進としたが、曲学阿世の輩は又出ている。ここで赤信号を出して諫める必要はあると思う。

日本は戦後、大部外来語に侵略されている。この侵略は外人が飛び込んで行ったのではなくて、日本人が自分で招き入れたのである。寓話として何か例を上げて見よう。

1 農協らしいおばさんが「明日は八時に風呂へ集合と話していたけれど、お風呂は何処にあるの」、おじいさん、格好が悪いから「昨日と大体同じ所だよ」「あ、そうだったの、では早く部屋に入ってロビーに行きましょう」。日本人は団体旅行が好きで、旗を立てて、案内されて一緒に歩く。そして生半可な常識で珍談奇談を作って、自分でも感づかない。

フロント (front, 寓話では風呂の所と聞き違いした)、ロビー (lobby)、エントランス (entrance)、カウンタ (counter)、オフィス (office) 等がホテルの何処を指しているのか、本当に知っているのか、生半可な所で妥協していると思う。

又、テラス (terrace)、ベランダ (veranda)、バルコン (balcon)、バルコニー (balcony) は建物の何処を指していて話しているのだろうか。

2 ドナーはマンマンデーのチョンガーですね。結局この言葉の「は」「の」及び「ですね」だけはわかりましたが...?

ドナー (donor) は寄贈者、献血者、臓器移造の提供者の意味で英語。マンマンデー (man man de) は、ゆっくり、のろのろした意味で中国語、中国式には慢々的と書く。チョンガー (chongar) は結婚してもよい年頃の若い男性の未婚者の意味で韓国語。意味は大体分かったが、何を寄贈したのかは尚不明である。誠に敬服の至り、四ヶ国語を使いこなしている国民である。

ここらあたりで赤信号を出してストップをかけないと、日本語まで、怪しげになると思う。

「弁慶がなぎなたを持って立ちはだかっていた。」弁慶が通せんぼうをしていたはわかるが、なぎなたとはどんなものかな？ 多分武器の一種であろう、と適当な処で妥協しないでもらいたい。大の字になって通せんぼうすることを立ちはだかると言い、なぎなたと言う武器を知らない人はいるまい。自分で分節の区切り方をまち

がって、ぎなたは辞書にないから、外来語と考える様な弁慶読みは、感心出来ない。

私は排外的の復古調を提唱する、幕末志士の生まれ代りでもなければ、吉田松陰塾を開講して、一旗上げようとする気があるわけではない。只素直な気持ちで事に当り、唯我独尊の気持ちを捨てて、世界の中の日本であってほしい。日本の世界と欲張らない事である。

先回のオリンピックで「サヨナラ」と言う日本語を輸出した。同じ言葉でも第二次大戦では「バカヤロー」と言う日本語を輸出した。同じ輸出にしても、どちらが良いか、論を待つ迄もない事である。同じ輸入語でも、毎日食生活に欠かせない「沢庵」は中国よりの輸入品であり、中国から渡来して来た沢庵和尚が製造を伝授し、日本の食べ物となり、和尚の名を取って沢庵と言う日本語が出来た。それをわざわざ日本語らしく「大根漬け」と言い直しても愛国者になるわけではなく、又「ピクルド ラディッシュ」(pickled radish)と英訳して、知識階級になったつもりでいるのは、頭がおかしいと思われるのが関の山である。偉ら振る人を「目糞が鼻くそを笑う」と言うが、目くそ、目やに、は英語で何と言うのでしょうか。耳垢と耳くそはどう区別する、かと聞いたら参ってしまうと思う。又「お前等支那人に沢庵味がわかるもんか」と言う様な怪しからん事は言わない事だ。自分の無学事が露見する許りでなく、反感を買う事、これに勝るものはないのである。

ポツダム宣言の受諾で終戦となった。ポツダム宣言の受諾は勝利を意味しない事は、論を持つ迄もない。軍隊が満州へ進出した。慰安旅行ではあるまいし、軍隊が鉄砲担いで外国へピクニックと言う事もあるまい。侵略と訂正させなければ気がすまないと言うならば、心が狭過ぎる。教科書には教師専用の教育細目が配布されるのが原則である。それに準拠した教育で、子供達が成長した後、今後進出する時は、ロケットに原子弾を着けた方が良い、等と考えさせ、それを実行に移させたら、日本は自分で蒔いた種を自分で刈り取らなければならない時が又来るだろう。

日本は優秀な技術とシンクタンクを持っている。これを善用して、地球上の楽園を造ると良いと思う。明治以来三代かけて作った財産を一夜にして潰した昭和の子、これを一代で再起出来た事は奇蹟である。だが、再び棒に振る様な事があってはならない。御先祖様にも申し訳ない事である。

日本は当用漢字の制限を行い、非常に良いと私は思っている。新かなづかいを修正し、私も感心している。何となれば、昔はよく「チヨウチヨウ」とふりかなをして、お仕置を受けた劣等生を思い出す。「テフテフ」とふりがなをして、どうして「チヨウチヨウ」と言う発音出来るのか、先生もよく説明出来なかったのではないか、と思う。「チヨウチヨウ」と書けば幼稚園の子でもすぐに書けると思う。揶揄しているのではない。最近では侵略を進出と改訂して物議をかもしているが、それはそれで良いのだ。時間と人間としての素行が実証してくれる。今度は当用

外英語を編成し、不必要なものには原文を片仮名の後につけると良い。

シンガポールは必要上、英語、中国語、マレー語、印度語、と四つの言葉と文字で布告を出す。しかし正式文書の原本は英語、と明記し、全国民はそれで便利であり、小学校から、英語、中国語、マレー語、と三種の言葉を教育する。世界何処に行っても不自由する事はない。そして正確な言葉を話す。ソ連やラテンアメリカに行く時だけを除けば…。しかしそんな所は彼らの生活と直接関係の多い所ではない。この第三中国は立派な世界人である。他山の石にしたい。

あとがきに代えて（笑顔で振り返られる人生を）

作者と同じ台中師範の卒業生の文集の中に下記のような詩が掲載されていました。名前などは分かりませんでした。日本教育を受けた台湾人です。すばらしい作品なのであえて「あとがき」に代えて紹介させていただきました。

「笑顔で振り返られる人生を」

自分に対して忠実に
物に対して確実に
人に対して誠実に 接してゆけば
たとえ そうすることによって
よい結果が得られなくても
決して悔いはないものである

わたくしの人生はたった一度しかなく
この世にたった一人しかいない
自分なのであるから
その自分を生かし 周囲のものを生かし
すべての人を生かしきるような
人生にしたいものである

つらいときや かなしいときは
いつも澄んだ瞳で広く深い空を見上げ
姿勢を正して
周囲にただよう新鮮で透明な空気を
胸いっぱい吸いこもう

うれしいときや たのしいときは
いつもその幸せを一人じめにせず
人にわかち合って共に喜ぼう
いくらこの世が 喧騒（けんそう）と
欺瞞（ぎまん）に みちあふれていても
みんながもっと美しい

ほんとうに尊いものが
あることを知っている

そうしたものを限られたいのちの中で
せいっぱい育ちあげれたら
きっと うれしくてたまらないだろう

そして いつの日か
人生のおわりに至ったあかつきには
自分のたどって来た道をふりかえって
静かにほほえめるような
悔いのない一生を送りたい

第二次大戦の戦勝国・日本

著 水方仁子
著 喜早天海

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
